

『トクシマ・アンツアイガー (徳島新報)』 紹介



『徳島新報』 翻訳・刊行会
2006年3月

目次

序	2
「徳島俘虜収容所」について	3
『トクシマ・アンツアイガー（徳島新報）』について	3
俘虜たちの生活から	5
音楽活動	39
徳島オーケストラ演奏会プログラム	48
おわりに	59

序

『トクシマ・アンツアイガー』は、「徳島^{ふりよ}俘虜収容所」内でドイツ兵俘虜*によって発行されていた新聞である。これは『徳島新報』とも訳して紹介されることも多いが、今回は原文のカタカナ表記を採用する。さて、この新聞の再発見から5年経った。その間、日本全国およびドイツのボランティアの方々のご助力をいただき、原版の手書き原稿の解読とラテン字体への転記がほぼ完了しながら、その内容の紹介は一部にとどまっていた。その全体を翻訳することは必要かどうかは、これから検討するとしても、俘虜たちの生活や活動、思いといったものが、彼等を取り巻く状況とともに反映されている記事については、やはりできるだけ早く紹介したいと考えている。

今回は、残念ながら諸般の事情から、この収容所新聞について簡単な紹介と、俘虜たちの生活と活動に関わる部分を紹介するにとどめたい。なお以下では、紹介文についてはゴシック体、翻訳部分については明朝体を使って印刷し、区別しやすいようにしてある。また身近雑事を扱った記事には、徳島市周辺に住む人にはなじみ深い地名がよく現れる。少し煩雑であろうが、なじみのない人のために注を付しておいた。

* 「俘虜」とは一般の人々にとって聞き慣れない言葉だが、捕虜と同じ意味である。当時は公文書にしる、新聞にしる、「俘虜」を用いていたので、ここでもこれを使うことにする。

「徳島俘虜収容所」について

この新聞の内容を紹介する前に、「徳島俘虜収容所」について手短かに紹介しておきたい。この収容所は、第一次世界大戦の青島戦による俘虜を収容するために日本国内に開設された俘虜収容所のひとつである。1914年（大正3年）12月に現在の徳島県庁のあたり（駐車場付近）にあった県会議事堂（のち公会堂となる）に開設され、1917年（大正6年）4月に板東に移転すると同時に閉鎖された。収容されていた俘虜は総勢206人で、人数も少なく、またほとんどが同じ部隊に所属する兵士であったので、比較的まとまりが良かったように見受けられる。所長は、後の「板東俘虜収容所」と同じ松江豊寿中佐である。この新聞中では彼自身への言及は2カ所にすぎないが、俘虜の待遇の良さについては何カ所かで述べられていて、後の板東時代と同様に俘虜の処遇に心を配っていたことがうかがわれる。これは残存する日本側の公文書について見てもうかがわれることだが、それについては機を改めて紹介したい。

『トクシマ・アンツアイガー（徳島新報）』について

『トクシマ・アンツアイガー』は、1915年4月5日（月）が第1号の発刊日となっている。これ以降、日曜日ごとに発行された週刊新聞である。ただし、第3巻第9号からは隔週刊になっている。この新聞のうち第1巻第1号から1916年9月17日（日）の第3巻17号まで、全体で67号分のコピーがわれわれの手元にある。第3巻18号以降の発行が実際にあったのか、それとも何らかの事情で廃刊となったのか、現段階では不明である。

俘虜たちが新聞発行をするに至った事情について、第1号の冒頭に「発刊の辞」とでも言うべき文章があるので、それをまず紹介しよう。

以前から久しくあった要望に応えるため、われわれは今日この新聞を公共の場に提供し、もって長年にわたって花開き、成長し、繁栄することを望みたい。

新刊の新聞は、たいていこのような言葉とともに世の中へと出される。

本日世に出たわが『トクシマ・アンツアイガー』は、このような美しい発刊の辞を、単に言わずにすむだけでなく、放棄しなければならない。というのも、それは全く不適切な言葉だからである。せいぜい「以前から久しくあった要望」は正しいとしよう。しかし、当俘虜収容所を「公共の場」と言うのは意味をなさない。また長年にわたって続くことをこの新聞に対して望みはしない。われわれが、この収容所の門を出て、愛しいドイツの故郷に戻る旅

につく日に、この新聞が発行されなくなるはずだからである。われわれの誰しも、その日がやがて、すぐにでもやって来ることを望んでいるのだ。

この新聞のしようとするところは、端的に言うとおりのことである。まず、ドイツ、アメリカ、イギリス、日本の新聞に掲載の電文ニュースを定期的に全体へ知らせる。それは一部は『トクシマ・アンツアイガー』の各号で、一部は新聞の発刊されない日については掲示によって行う。

これについては、この場ですぐに注意しておきたいが、イギリス、フランスおよびロシアを報道源とするニュースは常にある種の注意をしながら読むことである。

さらに『トクシマ・アンツアイガー』は、この戦争で最重要な事柄について掘り下げて報道し、他社の新聞から特に適切な論説を引用するつもりである。

最後に、われわれの日常の生活におけるできごとにも目を向け、ここでの生活の単調さを少しでも打ち破るのに適切と思われるような刺激を与えたいと思っている。例えば、本紙のチェスコーナーなどはこれに該当するだろう。

『トクシマ・アンツアイガー』に掲載されるのは、常にドイツの勝利であり、最後にはわれわれの願望と期待が実現される名誉ある和平の報道であることを願って、世に送り出したと思う。

このようにこの新聞の使命が記されている。まとめて言うと、日々の戦況報告、戦況分析と国際情勢、それから自分たち自身の日常の活動報告と娯楽記事ということになる。ただし、最初の日々の戦況報告については、逐一掲示板によって知らせることになったため、この第1号だけの掲載に終わった。

この新聞の出版は、謄写版を使って行われている。当然ながら手書きのガリ切り原稿であって、しかも古いドイツ筆記体によって書かれている。今回紹介することはできないが、挿絵も多く使われ、多色刷りも試みられていて、後に板東での数多くの優れた出版へとつながるようである。但しこの新聞ではまだまだ不鮮明な箇所も多く、古い字体と相まって判読に困難な場所によくぶつかる。技術的には発展途上と見ることができる。

俘虜たちの生活から

この新聞の中には、ドイツ兵俘虜たちの暮らしぶりや活動を伝える記事が数多く見られる。一方、「徳島俘虜収容所」は町中にあり、外出時には周辺の市民の日常の活動を普段から目にするが多かったことと思われる。そこで周辺の日本人の生活・習慣などを、どのように眺めていたのかを知ることのできる記事も見られる。ここではそれらについて、独立した記事をいくつかと、その後2つのシリーズコラムを紹介しようと思う。

桜の花（第1巻第2号、1915年4月11日）

桜の木が豊かな花の衣装をまとった様子が収容所からも見ることができ、美しく楽しい色彩でわれわれを楽しませてくれる。このうらかな春の日に、老いも若きも富める者も貧しい者も晴れ着を着、女と娘たちは美しい色の帯をつけ、色とりどりの日傘を差して、公園へ周辺の山へと繰り出して、ピンク色の香り豊かな花のきらびやかな装いを楽しむ。花の木の下にはテントや売店が置かれ、多くの人々がいて、まことににぎやかである。故国でも木に咲く花は、遠出をする数多くの人々にとって常に目的となりはするが、自然に特に強い愛着を持つ日本人にとって桜の花の季節はそれ以上の意味をもつ。祭りの季節であり、喜びの季節である。時間が空くといつも花の木の下で過ごす。たった一本の木を眺めて何時間も過ごせるのである。しかしながら、わが国の花の木の方が日本の木よりも勝っている点がある。われわれは花の時期においしい果実を予期して楽しめるのに対し、日本人は桜を観賞用としてのみ見ている。果実はほとんど食用にならない。残念なのは、桜見物の遠出がかなわないことである。当地駐在の軍司令部が、市の周辺部からやってくる群衆による嫌がらせが起きないかと心配しているのである。

新しい舞台（第1巻第3号、1915年4月18日）

これまでの演芸の夕べで、舞台の設定は今ある非常に限られた手段を使って、常に非常にきれいなものであった（これは何よりもハナスキー予備役海砲兵のおかげであると言えよう）ことは認めるとしても、もっと高い要求にも耐えうる舞台が欲しいという欲求は大きい。この目標を達成するために、募金を行う提案がわれわれに向けてなされた。この提案に従い、募金帳が作成された。願わくば良い結果が生まれて、場合によって衣装の調達にまで手をのばせたらと思っている。そうすれば、これから先の演芸の夕べにすばらしい展望が開けることになる。

講座（第1巻第11号、1915年6月13日）

無為に過ごすよう宣告されてしまった時間も、できるだけ有益なものとするための最初の措置のひとつとして、講座をいくつか立てることとなった。

まず、戦争によって中断されていた、傷痍軍人資格者に対する講座が再開され、このほど終了した。

最大の関心を集めたのは英語で、今日37名の参加者が4クラスに分かれて授業を受けている。

フランス語は2コースに分かれて、17名が学習している。

個別の講座で最大の人数を集めているのは、ガーベルスベルガー速記法で25名いる。

地理の授業には20名が参加している。

一番最近できた講座はドイツ語で、同じく大きな関心呼んで20名の参加者がいる。

もちろんこれらの講座では、全てが多かれ少なかれ適切な教材の不足に悩んでいた。複写機*を使って、英語とフランス語の文法書と読本が制作された。ほんとうに簡素なものであるが、地図まで収容所の出版部で発行された。

図書室には英語とフランス語の作品もあるので、読み物についてもっとも要望の高い需要には応じることができている。英語の授業については「英語研究社」**の安い冊子が結構適していて、使い勝手が良いものであった。この冊子はおそらく日本の中等学校でも使われているものであろうが、フランス語については残念ながら類似のものがない。

全体としては、全講座で117名の参加者を数える。しかし、個々の講座の名簿を見ると、残念なことに同じ名前が何度も見受けられる。参加者がもっと全般的であるのが望ましいところである。

本紙で以前に挙げていた歴史と商業関係の講座は、まだ始まってはいないが、聞くところによると準備中であるようだ。

鶏小屋から（第1巻第11号、1915年6月13日）

わが優秀な養鶏業者は苦勞の末、やっと高価な大アサキ鶏を抱卵させることができた。これによってまもなく若鶏の生まれることが期待される。

広告（第1巻第11号、1915年6月13日）

合唱団の練習は、今週より火曜と金曜の午前10時から11時まで定期的に行う。

ハンゼン一等音楽兵曹

* 謄写版を指すようだ。

** これは現在の「研究社」の前身。

天神祭 (第1巻第18号、1915年8月1日)

先週の日曜日の夜、収容所から川でのすばらしい光景を眺めることができた。日本人たちが学問の神様を讃えて、いわゆる天神祭を行ったのだ。夜の闇が始まると、船が一团となってゆっくりと川を下ってきた。すべての船には色鮮やかな提灯がつけられ、ほとんどの船からは日本の楽器の「かわいい」旋律が響いてきて、それに歌声と手拍子が合わさっていた。とくに一風変わっていたのは何艘かの船で、大きなかがり火が焚かれ、それにとどき灯油がかけられて、ぱあっと明るく燃え上がっていた。川向こうで打ち上げられる非常に美しい花火で、祭りは最高潮に達していた。

とにもかくにもそれは、まさしく日本的風景であった。川と河岸の家並に彩り華やかな提灯が散らされ、いろいろな打ち上げ花火が夜空に舞い上がり、両岸には大勢の見物人、いたるところで音楽と歌と笑い声があった。単調な収容所生活にとって、歓迎すべき気分転換となった。

日本の盆 (第1巻第23号、1915年9月5日)

8月23日から26日にかけて、ふたたび日本の祭りのさまざまな騒々しい生活とふるまいを眺めることができた。盆の祭りである。昔は、亡くなった祖先を敬い祈念する祭りであった。この祭りは、以前はもっぱら武士とその家来によって一種のパレードの形で祝うものであった。

後の時代になって、蜂須賀ソウアン*という大名がすべての民にも、この日に祝いごとをなし、音曲と踊りを楽しむ許しを与えた。そのきっかけは大病からの快復であった。

このように全ての民がこぞって参加することにより、時代が経つにつれ盆の祭りは本来の意味と形を失ってしまった。この祭りの日々には、朝の7時から夜の12時まで踊りと音曲が許されている。

祭りの期間に見られたように、とりわけ若い娘と子供たちが、色とりどりの幻想的な衣装を着て、たいていはかぶり物や仮面をつけて、三味線の響きに合わせて歌い踊りながら、朝から晩まで通りを練り歩くのである。徳島ではとりわけ阿呆踊りをする。しかしこれらの踊りは、本来の盆の祭りとはもはや何の関係もないものである。

養豚 (第2巻第12号、1915年12月12日)

最近、喜ばしいことに収容所は、というより正確には収容所農業部門の家畜は新たに数を増やしている。しばらく前から雄鶏のラーケルカーケルを中心とする鶏小屋の住民たちが、

* ソウアン、蓬庵(ほうあん)の間違いであろう。これは蜂須賀家政が隠居してからの号である。なお、阿波藩の初代藩主はその子至鎮(よししげ)である。

その元気の良さでわれわれを楽しませている。数日前に鶏小屋の横に新しい立派な建造物、豚小屋が出来上がった。

学校の休暇（第2巻第14号、1915年12月24日）

今月の21日から全クラスがクリスマス休暇に入っている。授業の再開は1916年1月3日である。

日本の新年（第2巻第15号、1916年1月1日）

新年は、日本人にとって中心的な祝祭のひとつである。以前は、中国と同様2月中旬か下旬に祝われていた。これだと春の訪れと時を同じくし、民衆のあらゆる楽しみのきっかけになったものだ。ヨーロッパの暦の採用とこの国の近代化の推進とともに、この季節や新しい醒めた感覚に合わなくなった習慣が多く消え失せたのである。

新年への準備を、徳島でもいたるところで見ることができた。道路では、餅屋が調子よく杵をふるってお米をこねている。家の玄関には、松か竹の幹が立てられている。戸口の上には、藁を編んだものに羊歯〔ウラジロ〕と赤い伊勢エビと木炭をつけたものが下げられている。羊歯は清潔さを、エビは長寿を、そして木炭は不変を意味している。ユズリハは新しい葉が出て、はじめて古い葉が落ちるといので、その小枝もいくつも編み込まれる。これは、子々孫々家系が続くことの象徴だそうである。同じように、藁を編んだものが井戸やかまどの上にかけてられる。この日を祝うために、老いも若きも晴れ着をもちろん着る。祝い焼き菓子（そういう呼び方が許されるなら）として米菓子のモチ（餅）が食べられ、祝い酒として特別な薬味をつけた酒のトソ（屠蘇）が飲まれるが、それも結構な量を飲むので、祝いの気分が出てこないことはほとんどない。祝い客のためには客間が作られ、部屋の隅、トコ（床の間）には餅と海老と柿をのせた小さな台が置かれ、さらに三枚に重ねた杯と新年に徳利の代わりに使われる酒薬缶が置かれる。トコの壁には新年の意味に対応した絵のカケモノ（掛け物）が下げられる。一般に3日間祝う。女の子は道路で羽根つきをし、男の子は矢と弓で遊ぶか、凧揚げをする。家の中ではカード遊び、歌カルタをして時間を過ごす。

軍隊は12月29日に大きな整頓閲兵式を行い、30日と31日は休みとなる。新年には士官食堂で将校に対して簡素な食事があるだけで、その後互いに訪問し合うのである。

シリーズコラム「収容所生活から」

このコラムはタイトルどおり俘虜たちの生活をつづったものであるが、残念ながら次の5本の記事のみである。

第1巻第10号（1915年6月6日）

宣教師のライマース師とシラー博士がこの前の日曜日収容所に来て、カトリックと新教のミサを執り行っていたことは非常に喜ばしいことであった。どちらも厳かで神聖な雰囲気の中で行われたが、二人ともオーケストラと合唱団のおかげですばらしいミサとなったと強調されていた。ライマース宣教師は其上、自分が執り行ったミサで良い音楽を使えたのはこの6年間で初めてのことだと言われた。オーケストラと合唱団の団員全員に感謝の念を伝えてほしいとのことである。

当収容所の音楽家たちへの賞賛は、別の方面からも来ている。宣教師シュレーダー博士は手紙の中で、今月中頃に訪問の予定であるが、そのとき自分の執り行うミサで音楽を付帯させたいと特に希望されている。音楽家たちは、大喜びでこの希望に応えることであろう。なぜなら、ミサを立派なものにし、同時に来訪者に練習の成果を見せられるこの機会をぜひとも利用したいと思っているからである。

当初、お二人の宣教師に敬意を表し、ご来訪に感謝の念を表すために、先週の日曜日、最後のミサが終わってからコンサートを開く予定であった。しかし残念なことに、これはできなくなってしまった。

日本では良い音楽を聴く機会が減多にないことなので、お二人にきつと楽しんでいただけたはずと思うだけに、残念なことであった。さらに例えばドレンクハーン氏は、来訪時にコンサートをお開かせしたが、「単に驚いただけでなく、とても味わい深い楽しみであった」と書いてこられた。氏から常々援助をいただき、特に感謝を述べねばならないところであるが、このような形でせめてものささやかな喜びを差し上げられ、非常に嬉しい。

ところで [ドレンクハーン] 博士は同じ手紙の中で、クラリネット2本とフルート1本がこちらへ発送中だと書かれている。さらに楽譜も約束していただいている。

オーケストラにもうひとり、友人にして援護者が現れた。おそらくわれわれ全員が知っている第3海兵大隊音楽隊の指揮者である O. K. ヴィレ氏が、天津から大きな小包2つ分の楽譜を送ってきたのである。彼にもこの場を借りて、全員からの感謝の念を表明したいと思う。オーケストラは、このような多方面からの援助によってますます拡大していくことができるであろう。ここでちょっと打ち明けておくと、次回のコンサートの夕べにはすばらしいプログラムが並ぶことになるようである。

第1巻第12号（1915年6月20日）

今月15日、予告通り宣教師のシュレーダー博士が収容所でミサを行った。それはこれまで同様、美しく厳かなものであった。シュレーダー博士は他の収容所の戦友からの挨拶も伝えて、みんな元気になっていると言われた。熊本収容所は、夏には非常に不健康な状態になるため廃止され、そこにいた俘虜は久留米に移送された。福岡にいた200名も同様に久留米に移り、久留米は将校75名、兵員1300以上で最大の収容所となった。最小は大分で約150名、その次が約200名のわが収容所となる。ミサは合唱団とオーケストラに、ふたたびその芸術を示す機会となった。今回の祝典は、特にチェロとバリトンのソロによってすばらしいものとなった。

残念ながら、さしあたりこれがオーケストラの演奏を聞く最後の機会となった。今の気候では湿気が多く、暑いために弦が切れる被害*があまりに多く、しばらくオーケストラが休暇を取らざるを得なくなってしまうのである。願わくば、このやむを得ない休息が長く続きませんように。

第1巻第15号（1915年7月11日）

盛夏がやってくる。予期していた以上に、夏の暑さから守られていた時期が長かったが、やはり本気を出してきそうな感じである。このところの長雨がやみ、乾いた暑さにとって代わった。全員が野外で日常行事的に水浴したいと切望している。そのための準備がもうすぐ終わることを願っている。

サッカー選手たちは、雨がやんだとなったら早速、ふたたび緑の草地へと出かけて行った。ところが残念なことに、ゲームは不幸な経過をたどり、少なくとも2件以上の重大な事故が起きた。ヘルムート海砲兵が足を、シロー海砲兵が脚を骨折したのだ。この二人の骨折が早く治癒することを願っている。この季節、病院で臥せっているのは特に不快なことだから。

オーケストラも空気が乾燥してきたので、活動を再開した。こちらはサッカー選手よりは幸運である。なぜなら今までのところ弦が数本切れたぐらいで、切れたからと言って痛みはないし、骨折よりもたやすく復旧できるからである。

オーケストラの練習が規則的に行われ、長らく聞けなかったコンサートがふたたび聞けそうな様子である。無論これは天気がこれから先も良いかどうにかかっている。好運を祈ることにしよう。

* 弦楽器の弦は、現在も一部使われているが、昔はガット（羊の腸の加工品）であった。ガットは湿気に弱く、そのうえ弦は強く張られているため、湿度が高いとガットが切れてしまうのである。

第1巻第18号（1915年8月1日）

このところの2週間は当地で経験した中で最も暑い日々であった。毎日毎日、太陽が容赦なく照りつけ、日没後の涼しさを少しでも味わおうとしても、今度は蚊が楽しみを台無しにしてしまう。この夏の楽しみの頂点が過ぎて、8月が7月に負けず何度か温度を上げねばならないと思ってくれるよう期待している。

残念なことに陸軍省が野外での水浴を許可しなかったため、この暑さを特に不快に感じている。収容所内の風呂を夜10時まで利用できるようになったものの、それは水泳の代わりになりはしない。水浴の予定地の川岸に立てるはずだったテントは、バラックと本館との間の空き地に立てられ、少なくとも戸外にいるための日陰を提供している。

サッカーは、このところ全面的に休止状態。とりわけ暑さのせいである。もうひとつの理由は、城山横の広場*の整地をわれわれがするのを、市当局がどうしても許可しようとしなからである。8月については、学校の夏休みということで、中学校の広場が使える。こちらは収容所のすぐ隣にあるというだけでも快適である。

オーケストラは新しい楽曲を覚えることに熱心に取り組んでいる。これからは、すでに先週、先々週の日曜日に開催されて喝采を浴びたように、日曜日の午後、定期的に野外コンサートを開催して、われわれを楽しませてくれることになっている。

第1巻第20号（1915年8月15日）

先週の日曜日には、後々まで記憶に残る祝祭が行われた。ワルシャワ陥落を祝って、ミサが行われたのである。古い賛美歌「皆の者、神に感謝を」を歌って祈りを捧げた後、デュムラー大尉がこの日の意義を述べる演説を行った。彼はまとめとして、ポーランドの首都の征服にいたる状況について、ふたたび述べた。故郷の戦友たちへの思いを心を込めた言葉で語り、彼等の英雄的な犠牲心がふたたびドイツに究極の勝利への大きな一歩をもたらしたと述べた。演説は皇帝陛下万歳の声で頂点に達し、全員がこれに和した。それからオーケストラが懐かしい祖国の歌ときらびやかな行進曲、われわれの父祖たちが戦闘と勝利に向かって行進したときに鳴り響いていた行進曲を演奏した。このようにしてわれわれは勝利を祝い、ドイツ全土に吹き抜ける大歓声と熱狂とを感じ取ったのである。まるで教会の鐘の鳴り響く音と、町の通りを練り歩く大衆の歌声が遠くの故郷からわれわれの耳元まで届いているような心地がした。

* 「城山」は、原文では信号山。中野好夫はその著『主人公のない自伝』の中で、小学生の時この広場でドイツ兵俘虜からサッカーを教えてもらったことがあると語っている。

シリーズコラム「収容所の物見より」

このコラムは、ほぼ半年にわたって書き続けられたものである。とりわけ俘虜たちのふだんの暮らしぶりが浮き出ており、中には執筆者自身の脱走事件などがはさまれ、非常に興味深い。また筆者は何度か、手紙がなかなか届かないとか、やけに時間がかかるなどこぼしている。それだけ故国からの手紙を、心待ちにしていたわけである。遅延の理由はさまざまであるが、そのひとつに収容所で行われていた手紙の検閲があるかもしれない。全国の収容所で民間人通訳が雇用されていたが、彼等はほとんど郵便物の検閲に忙殺されていたようである。徳島で通訳として活躍していたのは、後の板東時代でもおなじみの将校の高木少尉であったようだ。

第2巻第20号（1916年2月6日）

俘虜収容所のできごとを扱うこのような週刊紙は、元来つつましやかな収穫しか得られない。そんなに出来事が、いろいろと起きるわけではないからである。小さな世界にしる、われわれのための小さな村を形作っているのであるから、小さな事柄も大きな出来事としての意味を持っている。そしてそのような出来事のひとつとして、日曜日にシラー牧師が心にしみわたる説教によって、ふたたび自省とわれわれ自身に「汝の中を見よ」へと導いていただいたことがある。ミサへの参加者全員の日常とは異なる晴れがましい服装だけでも、もう初めから改まった雰囲気になり、礼拝のあと本当に日曜日なのだと感じるのである。世俗的な方面では、夜の寄席が日曜日の雰囲気を持続にたっぷり寄与してくれた。寄席の素晴らしさについては、皆みとめたことである。今は一番乾燥している季節なので、収容所消防班の増強が必要となった。ところで、彼等は即席芝居の言葉を書き付けるためにだけ必要とされて、それ以外自分たちの能力を示す機会がなかったことに不満だったそうである。

このように必要な体系的な肉体鍛錬については、今では体操団が引き受けている。このことは二重に必要なのだ。トレーニングを全くしなくなっていて、平行棒での体操を見ただけで、体操が非常にうまい者ですら確実さと機敏さが大きく失われていることが分かったほどだ。熱心な練習によって、すでに大きな進歩が見られていて、最高位の体操選手を目指そうとする者もいるようである。誰もがそうなれる資質を持っているわけではないが、熱心な練習をすることによって、生まれつき不器用なものもかなりの能力を身につけることができるのである。最初の内ちょっとした筋肉痛や親指を捻挫したからといって、くじけてはいけない。もうひとつ有益な仕事への機会を提供してくれるのは、建築中の作業場である。道具類は今週、救援委員会から届いている。豚たちは場所を明け渡さなければならなくなった。たぶん負けるが勝ちとでも、思ったのだろうか。豚飼いは家畜を失って残念がっており、今はどうやれば同じように面白い仕事を見つけられるか考えている最中だ。豚の運命に導かれ

て、彼が收容所のソーセージ製造所に雇われることを思い至ったとしても、私は驚きはしないであろう。しかし、最近兵曹たちが夜中に部屋の中で猫を追っかけ回したのは、食料調達のためであったとは思われない。投げ損じをさんざ食らって、すっかりおびえてしまった雄猫は、「頭から壁にぶつかりたい [無理でもなんとかしたい]」と思ったのであろう、紙の壁 [襖?] を通り抜け、虐待者たちの手から逃れたのであった。

今日は、ふたたびサッカーの試合をしに出かけるつもりであった。ところが、ちょうど昼寝をしようかと支度を整えたところで、スポーツマンたちが出かけてしまう。だからといって、私は昼寝をあきらめたくはないのだ。天気については申し分ない。毎日晴天で、顔見知りの古老たちの言うところでは、今年は近年にない暖かい冬だそうである。しかし私はついてない。よりによって文章を書かないといけない今日になって、冷たい北風が吹き、指がかじかんでしまうのである。ネプケ [犬の名]、ヤーコプ [カラスの名]、鶏ども、楽団、合唱団、新聞、犬、風呂といろいろ書きたいことがあるが、寒くなってきた。火鉢の火が。またしても消えてしまった。火を消えないようにしようとする、今度は書くことができない。来週は、暖かくなってほしいものだ。そうになったら、また便りをしよう。

第2巻第21号 (1916年2月13日)

今週は、故国からの郵便に恵まれた。手紙と小包が、まさにどっさりやってきた。「小包を事務室まで取りに来るように」という声を聞き、数ヶ月も前に予告されていた贈り物をやっと受け取れたときの嬉しさはこの上ない。しかし手渡されたものが、板とリンゴ、ケーキのかけら、チョコレート、葉巻がぐしゃぐしゃに混じり合ったものであったり、包みを開くと中身が揺さぶられ、振り回された結果、全体がひとつのものになって現れるのは、何とも複雑な気分になる。できるかぎり救えるものは救おうとし、その後よけいにごっかりしてその場を去るのである。

この国で現在も祝われている、旧正月らしさはほとんど見られない。帆船が数隻、祝日を祝うために入ってきた。農民たちが、買い物をしに町中にやってきた。收容所の前を通りかかる人の中には、彼等の目におそらく奇妙に映るであろう俘虜たちの行動を興味深げに眺めている者もいるのが見受けられた。農婦たちは色とりどりの腰巻きをしていて、彩りはなやかである。和服を汚さないように、裾を上げてあるのだ。

日曜日に上映の予告があった映画は、もう少しで中止になるところであった。というのは電灯がまたしても、ちかちかっと光る程度にしか光らなかったためである。幸い、故障は上映前に直った。週間ニュースは私にとって競争相手となる懸念があったが、映画の前に話すことができて良かった。さもないと、結局ニュースを全部取って行かれてしまうことになるところだ。

冬はもう少し続きそうだ。中津峰*の頂は相変わらず雪に輝き、寒くて風も強く、収容所の中では風邪がかなり頻繁におきている。しかし、梅は寒さに惑わされることはない。木曜日の外出のとき、大谷**で花をめどることができた。たった一本だけ、せいぜい3、4本、花を咲かせた木が並んでいるのにはちょっとがっかりした。ドイツと様子が違うのである***。日本人にとっては1本の木が花咲いているだけで、十分に詩的な心の吐露へとかき立てられ、それを紙に書き付けて、歌を詠んだ木につり下げるのである。まさにこの梅の花は、日本人の特に尊重するところであり、画家にとって主要な題材であり、その独特の性質をきわめて綿密に研究している。梅の花はまだ冬という時期に雪と寒さに耐え、武士にとってもその忍耐力を見習うべき手本でもあった。ただ残念だったのは、外出がもう少し先の山まで延ばされることがなかったことである。

風呂は長らく休止していたが、全面的に再開となった。ボイラーがいくつか改修を受け、今のところ非常に快調であるが、ただしいつまで持つか疑問である。

作業場が完成し、中では熱心な作業が、数多くの見物人の目をもものともせず行われている。作業場への途中には、元気のよいアヒルたちもいる。鶏小屋の居心地が本当に良いらしく、先輩の鶏たちはその中で増えていかない。雑草のようなヤーコプはあちこちと跳ね回り、その人から好かれていようが嫌われていようが、靴をつつき、靴ひもを引っ張っている。もういろいろと覚えたが、それを出すのは生け垣の後ろに隠れて、自分のまわりに誰もいない時だけである。そうすると、「ヤーコプ」という呼び名をいろんな調子で声に出し、パチンという声を出しカアカアと鳴く。その声を聞くのは何とも楽しい。シュテプケ[犬の名]はヤーコプには知らん顔をし、彼を目にすると大回りして避ける。これに対してかわいい縮れ毛のスピッツであるフェリックスは、ヤーコプとじゃれるのが大好きである。ところがヤーコプの方は、不器用にぱくつと噛み付かれるのが嫌いで、ごみために向かってような態度を取る。

今日のところは、もうこれくらいにしよう。

第2巻第22号（1916年2月20日）

日本は今なお、時が金ではない数少ない国のひとつである。これは、祝日の多さを見ただけでも分かる。旧正月が終わったと思ったら、エビスである。これは商業、漁業、航海の神、さらに七福神のひとりである恵比寿の祭りである。だからここに住む人たちみんなが、この神を拝み祭っても不思議ではない。田舎の人たちが、大挙して町を目指してやってくる。またふたたび、大勢が収容所の周りを物珍しげに取り囲むので、外に特別に歩哨を立てないと

* 徳島市の南部、市内から12、3kmほどにある剣山系最東端の山。標高773m。

** 現在の徳島市大谷町、市内から5、6kmほどのところ。かつては梅の名所だったそうである。

*** 著者は梅をプラムと表現している。たしかにプラムの花は、桃のようににぎやかである。

いけなくなった。たいていの人たちは、縁起物の赤い紙切れのついてわら帯を頭にかぶったり、小さな稲束のついた竹の枝をまだ手にしていた。われわれにとっても、日曜日はふたたび祝祭日となった。今回は、新教とカトリックのミサがあった。教会関係者の方々が、このように今の季節には本当につらい旅をわれわれのためにしてくださることに対し、感謝してもしきれないほどである。

夜にはふたたび、劇の上演があった。演劇指導者が目的意識を持って、ますます難しい作品を取り上げていくことに賛嘆せずにはおられない。こうやって楽しませてもらうと、平和の鐘が打ち鳴らされてクラゲルフィンゲンやヴェルネルズキルヘンに戻れと言われた時、この劇を見ることができなくなって残念な気持ちになることであろう。

展示会が計画されたことで、近い将来のための労働意欲に歓迎すべき目標が与えられた。多くの者が、早いうちに気づかれることのないようにこっそりと作業をしていて、クリスマスの仕事かと思わせるほどである。何人かの人に聞くと、展示に適したものが見当たらないそうである。こういう人たちには、次のようなものを提案したい。暖房が利きすきま風の来ない収容所の模型、防音設備のととのった音楽堂の模型、酒保の常連客用の小部屋の模型。移動可能な個室も大いに共感を得るであろう。これらのアイデアについては何の対価要求もしないが、もしそこから利益を得るものがあるとしたら、その一部の適当な金額を公共の目的のために寄付していただくようお願いしたい。

故国から山のような郵便物が来ている。私は寒くて寝台に引っ込んだのだが、そこで新聞と手紙の中にほとんど埋まるぐらいであった。その郵便物を見ると、ロシアの検閲は祝日が終わって再び再開されたようである。その熱意が、冷めないといいのだが。--- 寒さは、それ自体異常という程でもない低温で感じる以上のものを感じさせている。寒さのために、なかなか寝台から抜け出せない者もいる。もちろんこれは、故国でも同じことがあるだろうが。とにかくこういう気候、こういう宿泊施設に不慣れなのである。最近は何でも中でも、分厚い下着を着なければならない。いちばん気持ちがいいのは、よく暖まった風呂である。ただいつも残念ながら、次の順番の者が待っているので早く出ないといけない。

上出来のジョークがどれほど効果を持つものかを、数日前に上演されたフリードリヒ・シュトルテ作の『血豆』の異本が示した。ナイフを振り回しての争いのあげく、商売上手なソーセージ製造人*の身体から黒い血が大きな流れとなって滴り落ちるのを見た時、心が純な者たちは、ああ出来たてソーセージもこれで終わりかと思った程である。最後になって、すべてがトリックであり、殺され役は血の入った豚の膀胱を胸のところに持っていただけなのだ気づいて、ほっと息をついたのであった。しかし世間では、見かけに惑わされるということはしばしば起きることである。

* 今回紹介していないが、第2巻第7号(1915年11月7日)にハナスキーの肉屋開店の広告がある。

この間アルバム用の写真が渡された時、私は驚いた。こんなものを購入していたことを、すっかり忘れていたのである。しばらく考えて思い当たったことは、ずっとずっと以前に、写真の貼っていない立派なアルバムをめくりながら、心のうちで注文した写真をそこに並べていたことである。しかし写真がなかなか来ないために、その美しいアルバムは次第に埃にまみれてしまった。それを今、まともな体裁にしろというわけである。「自家製」で写真を作るのを、これから確保すべきであろう。外部への注文は、当てにならないことがはっきりしたのであるから。

夜中の安眠妨害については、まるまる1章書けるぐらいである。最初に猫たちが何とも哀れっぽく美しく鳴いたかと思うと、ちょうどその時間に近所の犬どもがおそろしく長い遠吠えをする。普段はお行儀のいいシュテプケも、夜毎外に出かけると収容所の周りを一周し、その際に歩哨に向かって吠えかかるという悪い癖がしばらくの間あった。しかし最近、夜中にしばしば鋏を打った靴の重い足音が聞かれる。どうやら当直の下士官が、禁止されている小道をさまよっているものがないか、時折確認しているらしい。夜中にネズミが走り回っているのを聞くのも面白い。無論これは実際にあったことなのであるが、顔の上を走られてから目を覚ますなどしてはいけぬ。あちこちと素早く動き回り、ちゅうちゅうと鳴き、齧りがさごと引掻く。もしこの動物を自らの目で寝台の下とか戸棚の中で見るのがなかったならば、家に住む妖精の存在を信じてしまうだろう。ここには、害獣駆除業者の活動の場がたっぷりある。むかし本当に猟師であった者も、罟の仕掛けをおこなうことである程度狩猟の技を保てるであろう。私も、もし編集者として全力を傾けて収容所のできごとに当たらなくてもよければ、きっとこの分野のスポーツに身を投じるであろう。それまでは、自らその活動を行うのではなく、将来の収容所の猟師の獲物と猟の冒険を述べることを許されるのみである。とはいうものの良き猟を。

第2巻第23号（1916年2月27日）

ほぼ1週間、雨と雪のために収容所に閉じこめられていた。雪の降る楽しげな様子を見ていると、すべてを美しい雪景色に変化させようとしているみたいであった。しかしそのためには、いくら寒いとは言っても温度が高すぎた。周辺の山だけが、どんと雪に覆われていったが、下界のこちらではその分よごれが増えていった。長い間、雪は降り止まなかった。それから雨が、再び単調に屋根を叩くようになった。このような長雨は人の気持ちを暗くさせるが、待望の故国からの郵便が来ないとなるとなおさらである。あらゆる危険から遠ざけられているわれわれにとって、郵便が来ないことのような、それ自体つまらぬ出来事もいわば運命による打撃であり、それを甘んじて受け入れざるをえない。前の日曜の出来事はコンサートであった。娯楽に関して言うと、この収容所は故国の小さな町以上のものを提供してくれる。これを除くと時間はゆっくりと流れ、雨は人の行いにスタンプを押していった。全

てに終わりがあるように、雨も最後には上がった。雨が静かに降っている最中に、珍しい客人が港に入ってきた。キヨタケ丸という立派な横帆式帆船がタグボートに引かれて入港したのである。すこし大きな帆船としては唯一、ここには定期的に石炭を運んでくる3本マストの帆船が入ってくるだけである。キヨタケ丸は船乗りの間で注目を浴びたようで、次々と生け垣越しに船を眺めていた。おそらく、全員が同じ願望を心の内に抱いたことであろう。あのような船で再び航海することができたならば、と。

雨にたたられた日々が終わり、長時間の外出ができることになった。望む者も多い山に向かうのではなく、吉野川沿いの平野を歩くだけのものであったが、平野にもそれなりの魅力はある。お日様はまだ耐えられないようなものでなく、われわれをやさしく包んでくれた。平野の両側に連なる黒い山並みと、そのずっと背後には光り輝く雪原を遮られることなく見渡せて、平らな陸地の魅力のない景色では得られないような変化の楽しみを、常に目に与えてくれた。畑にはほとんど麦が植えられていて、すでにびっしりとみずみずしい緑の葉が育っていた。葉を落とした灰色っぽい桑の幹を見ていると、春がまだこの地を訪れていないことを思い起こさせる。トクメ*の寺で休息を取ったが、土地の人たちが物珍しそうに珍客のまわりを囲んでいた。帰り道、トチマ橋**で思わぬ休止が入った。浚渫船が橋の所を通れるように、橋の梁と桁が一部外されていて、元通りに置かれるまでしばらくかかったのである。橋はわれわれの観念から見て本当に壊れやすいもので、腐った板が数多く見られたことからすると、ここにはどうやら賠償義務というものがないようだ。もちろんこれらの橋は、特に重い荷重に耐える必要はない。俘虜収容所の者がそこをたびたび通過することになれば、早晚だめになってしまうだろう。この前も、ひとりひとりゆっくりと渡っていったにもかかわらず相当揺れていたから。

第2巻第24号（1916年3月5日）

今年は冬の始まるのがかなり遅かったが、今はここが気に入ったらしく居座ってしまっている。月曜日には、20℃の南西風の嵐がすべての山から雪を吹き消してしまい、もう春が始まろうとしていると思ったぐらいだが、その翌日には今度は同じ分量の雪が山並みを白で覆った。それからは絶え間なく氷のように冷たい北西風が吹き、火鉢にいやな臭いを出す木炭を入れて、絶えず燃やし続けるとどうにもならない状態である。頭痛か風邪が、唯一の選択である。もう春になるまで、そんなに長くはないはずだ。というのはすでに収容所では春の長雨に備えて、水はけの溝を深く掘ったからである。強い雨が降ると、中庭全体が一つの池のようになってしまうのだ。

* トクメ、徳命のことかと思われる。吉野川北岸にあつて、現在の藍住町徳命である。

** トチマ橋は不明。

収容所には井戸が3つあるが、残念なことに最後に掘った井戸も塩分が混じってきて、料理の水はふたたび学校の井戸から運ばねばならなくなった。2つの井戸については徹底的に井戸浚いをおこなったのだが、水の塩分はそれによって改善することはなかった。洗濯や掃除のために、もっぱら良い井戸の水ばかり使ってきたことで、消防ポンプ小屋側の井戸の淡水の枯渇と塩分を含んだ水の侵入を招いたことは疑いない。

最近になって、しぐさがかわいくて手入れの良いアライグマの毛皮をしたスピッツ(?)のフェリックスも、また顔を出すようになった。梅の花見に出かけた時大谷に居残っていたが、収容所のすばらしい料理を食べたくて、また遊び仲間のヤーコブにも会いたくなって、かつてのふるさとに戻るまでは腰を落ち着けることができなくなったのだ。フェリックスが帰ってきた時、こんなになついているご褒美に、えさを特別多くしてもらっていたら嬉しいところであるが。

昨日、在東京アメリカ大使館から2名のアメリカ人が収容所を訪れた。視察には、収容所の将校の他に衛戍司令官*も付き添った。二人は部屋をひとつひとつ見て回り、何の問題もないと思ったようであった。悪い状況が収容所内に見られるということも全くなかった。せいぜい何か悩みはないかという質問があったとしたら、残念ながら多数の者にとって悩みはないと、答えざるを得なかったであろう

昨夜は、消防の騒々しい音で眠りを妨げられた。すなわち、こんなことは目新しいことではないので、たいていの者は私同様ほとんど眠りを妨げられたほどでもない。3番目の橋のそばのホテルが、全焼した。消防の活動がよくできていることを認めなければならない。というのも風が強くて、隣家に燃え広がりかねないところであったからである。こうして火事は、火元だけですんだのであった。

このところ楽団は週に2日、全体練習を休んでいる。音楽学校生たちも、ある時間には練習を止めるということができないものだろうか。今はどの時間にも、何かの楽器がどこかで練習をしているのが聞こえる。これは図太い神経の持ち主にもこたえることである。そうでなくても騒音の多い収容所の活動のなかで、ヴァイオリンなどの練習音は関係のない聞き手にとって、たしかに楽しいことではない。授業のために何かしたいと思う者もいる。しかし、絶えず鳴り響く音から逃れられず、思考を集中することができない。たしかに練習は、楽団から本物の音楽を聞きたいと望むならば、楽団に認めてやらねばならない必要悪である。しかし、ある程度の限度というものもある。

読書家にとって嬉しいことに、図書室は500冊にまで増大した。これによって、私の文学的成果への関心が隅へ追いやられることを恐れねばならなくなるほどである。だからといって人を恨むことはできない。私自身も、とくに校正のために記事を読むのは好きではない。

* 現代語で言うならば、さしずめ [徳島] 駐屯部隊司令官。

これはたいてい昼寝の時間と重なるからだ。まあ、これ以上個人的な話は止めよう。自分の心が二つに割れそうだから。

目下のところ、非常に危機的な時期を迎えているようだ。外国の新聞はすべて、ドイツがヴェルダンを目前に、戦争の行く末を決定づけようとしているとする記事にあふれている。まさに、それを切望するところである。もしわが軍司令部が実際にこのような意図を含んで攻撃を行うならば、その意図を実現させるために必要な手段を講ずることが可能であると、われわれは確信している。その場合には初めの数日間のうちに、外国の専門家と称する連中が大声で、ドイツは西部戦線に対してはもはや何ら有効な攻撃を加えることはできないと予言していたことが、誤りであることが分かることになる。神よ、ヴェルダンへの攻撃が、フランス報道によれば撃退されているそうだが、これまでどおり継続しますように。

第2巻第25号（1916年3月12日）

謝肉祭の舞踏会がなかったなら、謝肉祭当日であること、あるいは謝肉祭だったことを忘れてしまうところであった。甘美な旋律の音楽がたつぷりと演奏され、ダンスホールを満たしていた。コスチュームや仮面の強制はなかったが、女神テルプシコラの信奉者の中に混じって、特徴的なコスチュームをまとった者が数人動いていた。すべて名誉を保って進行したので、威厳のある牧師様までご自身でダンスをされ、最後まで残られたのであった。近視のイギリス人がひとり、望遠鏡の代わりに見つけたビール瓶を通して、いまいましてに無邪気な祭りを眺めていた。

鶏などの飼育が最近、ますます拡大している。いろいろな予言もものかわ、ぴよぴよとにぎやかなひよこたちの一群が生まれている。これだけでは足りなくて、孵化器からは小さな連中がもっと生まれてくるそうである。ひよこたちの頭上、鶏小屋の無数の小部屋の一つに押し込まれるようにあった小さなハイタカの巣に、大きな鷺が移ってきた。哀れなハイタカはタンタルスの苦しみを味わわねばならない。薄い板で隔てられたむこうにいるご馳走を考えると、よだれが出てくるだろう。きっと、ちびどもの長命を願ったりはしていないだろう。別荘はどんどん広がりを見せている。全般的に、収容所内の建築作業は非常に活発である。バラックの裏と横に立派な区画ができて、そこで好運な家屋所有者たちが、騒々しい大部屋とは異なる、静かな暮らしを楽しめるのだ。ソーセージ製造所は増築をせねばならなくなったが、これはこの旨い加工品が売り上げを増している証しである。監視将校部屋の横手にある区画にも、同様にさまざまな建物が建てられているが、これはどうやら居住と営業の目的に使われそうである。

徳島の殿様が、[かつての]領地を訪問した。公園内の宮殿*で、彼を迎えてさまざまな

* 徳島市の中央公園にあった千秋閣のことであろう。

祝典が催された。木曜日の朝に彼は、満艦飾のキヨタケ丸に乗ってどこかの島へ出かけた。

木曜日の夜には奉天会戦（1905年3月1日～10日）を記念して、眉山^{びざん}*の記念碑までたいまつ行列が行われた。果てしなく続く光の帯が静かに黒い山の斜面を登り、帰りには急ぎ足で騒々しく下りてきた。

本紙の記念号（第50号）について、は本当は黙っていたかった。さもないと、まだいつまで続くのかという質問がふたたび強烈にふりかかるからである。一番良いのは、長期間になるのを覚悟しておくことである。そうすれば将来、早く終わったときの失望がその分気持ちのよいものになる。ドイツ軍はまさに、早期決着をつけようとしているところである。もう3週間以上も、ヴェルダンをめぐる戦闘が続いている。ところどころで、輝かしい成果が得られている。究極の目標に向けて徐々にではあるが、確実に前進していることを信じたい。

第3巻第1号（1916年3月19日）

真夜中に点呼の呼び出し音が鳴り響くのは、実に異常なことであって、最初は誰もそれについて報告をする気にはなれない。うとうとした状態で寝返りを打ち、警報音は夢の中で聞いた音だと思う。そこへ無愛想な声が鳴り響き、人の眠るこんな真夜中に本当に外へ出なければならぬのが、真面目な話であることを思い知らされる。こんな不意打ちに点呼をした原因とは何か？ 収容所の仲間の一人が行動欲、とりわけ最後の半分のせいで、外界への衝動を感じて、それを実行に移したのだった。彼は外で何度か争いをくぐり抜け、その結果やがて脱出が知られるところとなり、追っ手が彼の後を追った。それでもその手をかいくぐって、収容所内の自分の寝床に大急ぎで隠れたというわけだ。今彼は、孤独な場所で自分の行為について反省する機会を与えられている。聞くところでは戻ってきたら自らの冒険を小説にして出すそうだが、それは疑わしい。

今週は不可欠な身体的運動の場がたっぷりと供給され、芝生のスポーツ [サッカーのこと] の愛好者が3度腕や脚をくじいた。ゲームに熱中のあまり、時として身体を互いにつつけ合ったり、ボールを大きく蹴り損なうなどということが起きる。ちょっとユーモアを以てことを解する人ならば、見物していて大いに楽しめるものである。特に過激な激励と、なじり声が響くときが、そうである。眉山の登山は、ハイカーや自然愛好家を引きつけるものがある。山頂には低い笹しか生えていないので、視界が開けているのだ。視線は遮られることなく、徳島の灰色の屋根のかなた、数多くの水路が走る緑の平野とそれを茶色に縁取る集落とが見渡せる。海も東の方角にのみ開いており、淡路島とほとんど水平線に溶けかかりそうな紀伊半島**が海と陸地の境となっている。内陸に向かっては山並みが、つぎつぎと形を変えながら折り重なるように連なっている。

* 徳島市内、市街地の背後にそびえる標高276mの山。

** ただし、原文では大和半島となっている。

最近はぽつんぽつんとしか来なかった故国からの郵便は、今やまったく途絶えてしまった。その代わり、今頃になってクリスマスの小包がやってくる。4ヶ月かかっているわけで、遅いが堅実とでも言おうか。幸せな受取人にとっては、遅かったということはないだろう。たいていの者はほとんど望みを捨てていたであろうから、それだけ喜びの大きいわけだ。

風呂場の隣のゴミ捨て場は、ネズミ取り罠として思いも寄らぬ吸引力を発揮するものである。小さな穴から入り込み、わら布団の中で不名誉な死を迎えるものがどれほどの数になろうとも、次から次へ新たな犠牲者がやってくる。この調子で行くと、そのうち日本人の方から家の神様の大黒様から従者たち全員いなくなってしまうように、拒否権が発動されるにちがいない。

3月10日から暖房がなくなり、バラック建て宿舎からは（煤が出るが）暖かいストーブが撤去された。残念ながら、天気の方はそんなことを意に介さないようである。中津峰はうららかな太陽の光で溶けたかと思うと、その度に新しい雪の帽子をかぶるのである。北西風が川を越えて吹いてくるので、帆船が流されないように新たなロープを張る必要があるほどである。しかし私は、この風にも良い面を見つけることができた。5時半頃、向こう岸のタバコ工場が終業となったとき、ちょっとした楽しみが生まれる。2人、3人、ときにはそれ以上の集団で、娘たちが下駄に足袋をはき、暗い色の着物にウールの首巻きをして家路に向かう。荒れ狂う風は、帽子をかぶっていない頭の見事に結い上げた髪の毛を無遠慮にもじゃもじゃにし、着物の下に入り込んで、着物をふくらませ裾を大きく開ける。するとさまざまな色が、ちらりと光って、裏地と腰巻きの赤、白、藤色、青といった色に、ふくらはぎの肌まで見えるのである。いたずらを受けた女たちは、袖をなびかせながら何度も着物の裾を押さえ、風の静かな脇道に入って、やっと少しの間の休息を取るのである。こんなことを眺めているのは、実に楽しい。ただし言うておくが、暖かくなりさえしてくれたらこんな風の戯れはなくてもいいのだ。

第3巻第2号（1916年3月26日）

「春はごうごうと音を立てて近づく」まさにこういう嵐に雨とにわか雪を伴った4月の天気とともに、新しい季節の到来が告げられる。至る所の家の庭には、咲き誇る桜と椿が見られる。柳はもう緑の芽を吹き、堤と畦の枯れた黄色っぽい灰色の草の中から深い緑が顔をのぞかせている。厳しい冬将軍の統治は終わり、「春にならねばならない」のである。日本人は春の始まり、つまり昼と夜の長さの等しい春分の日を祝日（春期恒例祭）として祝う。われわれが祝日であるのに気づくのは、たいてい隣の学校の生徒が登校して来ないからである。収容所の中庭では春の作業が盛んで、花壇を耕し、溝を掘り、わらと灰を施している。小規模な園芸農園が活躍の場を見いだした格好である。もうすぐあらゆる種類の花が新しい花壇でやさしい香りを振りまき、さまざまな彩りが固く踏みしめられた裸の地面と好対照を描く

ことであろう。

体操団は、練習時間に関しては全く不運な目にあっている。この数ヶ月ほとんど毎週、天気が悪いとか外出があるとか、視察があるなどで練習が休みになっている。もちろん、平行棒はいつでも体操したいものが見えるし、実際よく使われている。今ようやく、以前から期待されていた鉄棒が加わった。これで、長らく要望されていたことが実現するわけである。「位高き者には必然の義務あり」の原則にしたがって、ソーセージ製造所はその支配人の誕生日を祝い、食事の参加者全員にサラダにソーセージからなる豪華な夕食を提供した。おいしく量もたっぷりだった、というのが全員一致の判断である。ただ残念なことに、誕生日は年に1回しかないが、ひょっとしたら他の作業員の誕生日も同じようなご馳走へのきっかけにしてもらえるかもしれない。

天気の様子の気まぐれの犠牲となったのは、木曜日午後に海岸まで出かけた者である。海岸までは風を背に受けて、なかなか快調だった。何人かの帽子が吹き飛ばされて泥まみれになったり、水の中に落ちるのは面白い眺めであった。津田*の海岸では砂嵐が地を這い、陸地に打ち寄せる波は白い波しぶきとなって飛び散った。船はたった1隻の汽船だけ、それが風と波に向かって苦労しながら進んでいる。最初あんなにくっきりと見えていた山は、どんどんと厚い雲に覆われ、その雲が吉野川の平野部や海へと下りてきた。海に重くたれ込めた雲はまず淡路島を隠し、それから眉山も灰白色の壁の後ろに隠れてしまった。急ぎ足で帰途についたが、川にかかる大橋のところでもうひどい嵐の中に巻き込まれてしまった。顔に叩き付けられる雪はまさに針のようであり、風の向きが絶えずくるくる変わり、からだのどちらの側も雪を受けた。私はすでに凍えていたが、足袋を濡らさないように裸足で歩いている男がこちらへやって来るのを見たとき、なお数度寒くなった。「踏んだり蹴ったり」とはこのことで、この地の子供たちが戸口のすきまから顔を出して、ずぶぬれになった連中を見て笑っている。そして外出した者たちは、居残り組から嘲笑をもって迎えられたのだった。だが、そんなことで挫けはしない。やがて服を脱ぎ、また顔を出す。たとえさつき着ていたものが5月用のズボンか白い肌着であったとしても。どんな嘲りにも耐え、心のうちで「でも、やっぱり良かった」と思うのだった。

郵便は相変わらず小包だけ。手紙は滞ったままである。ときどき、ふらっと舞い込むものはある。奇妙なことに、これらの手紙は当地の郵便局のスタンプから判断して、何週間も前に到着したものである。これをどう考えれば良いか、さっぱり分からない。

第3巻第3号（1916年4月2日）

やっと春が本格的になった。本来ならば、私は読者のために自作の春の詩を披露して春を

* 徳島市の東南部、現在の徳島市津田町。収容所からこの海岸まで4 km もない。

寿ぐべきところだが、すでにこの面では十分な材料がそろっている。ゲーテやハイネ、アイヒェンドルフといった面々のうちの誰かを推薦し、その詩を手にとって、ドイツの春の勝利を詩で味わってもらいさえすれば良いのである。日本にはそもそも、われわれの知るドイツの春にあたるものはない。徐々に暖かい天候に変化していくのに対し、気温が激変し太陽がぎらぎらと照って、昼の時間戸外にすることがすでに心地よいものではなくなってしまう。今週は天気良かったのでゲームのための時間がたっぷりあり、毎日運動場に出かけた。ただ月曜日だけは、山狂いの連中のために眉山の登山が組み込まれた。これには、どれほど冷淡なものも暑くなった。

これから始まる暑気に備えて、もう取り組みが始まっている。ソーセージ製造所では、広い氷室が掘られた。そこには外が暑くなった時に、ソーセージを入れるスペースがあるだけではない。自分も、下の冷蔵庫に座れるわけである。水不足も、夏には深刻になるだろう。だから、そのための手段を講じなければならない。収容所の敷地内には、十分な水脈があると推測される。何かと異論のある、ダウジングロッドを使って探査を行うとの話である。南西アフリカでは、この謎の多い器具が実際に水のありかを見つけたことがあるのだ。日本では、もちろん形はヨーロッパとは異なるけれど、このダウジングロッドが広く使われている。特に神道の神主たちはこれについて大いに騒ぎ立てていて、水を探し求める時に、本来何の関係もない様々な知識で身の周りを飾り立てるのである。しかしダウジングロッドの本質はまだ完全に不明なままであり、科学はその効果について未だ説明を与えられずにいる。地磁気とともに、人間の体内でも活動する動物磁気も一定の役割を果たして、その効果は人が活動する場所では大きく減衰する。それゆえ水脈探査も朝、起床前に行うことができる。そうすれば、邪魔な野次馬によって障害を受けるおそれはない。最初の探査は、日曜日（4月2日）の朝に行われるとのことである。

かつてわれわれが収容されていた大阪収容所が、数日前火災に会った。隣接する工場から飛来した火の粉によって生じたとされている。火災は午前9時に発生し、13棟のバラックが半時間のうちに燃え落ち、6人の俘虜が軽傷を負った。火災の間、収容所の警護に200人の兵士と警官があたった。混乱に乗じて、逃走を図るものがないか心配したからである。

鳥飼育愛好者が、ますます増えている。ひよこを大勢ひきつれためんどりが、さらに2羽大切に飼育されていて、ひよこたちが皆大きくなったら、中庭は鳥でいっぱいになり、鳥たちを踏み殺してしまう危険が常に生じることになる。だが、差し当たりその恐れはほとんどない。

鳥の他に、犬の数もまた増えてきた。ネプケと、叩かれている音からして現在修行中の身のフェリックスのほかに、マックスが風呂場のボイラーの下から現れたし、アヒル小屋ではさらに名前がついていない犬が成長している。カブトはたくさんのゴミに惹かれ、またやさしく扱ってもらえるので、外出のときの自主的な参加者になっている。信号ラッパの響きが

たまらない魅力を発揮するようで、衛兵所のラッパが鳴るたびに、彼は気持ち良さそうに美しく遠吠えをするのである。

許可されていない夜の外出を防ぐために、機械修理所裏の生け垣に有刺鉄線が張られて、かなり高くなった。庭では、さらに作業が熱心に行われている。ある花壇には一夜のうちに人の背丈より高い木がによつきりと生えたが、あまりの成長の早さに急速に枯れて、抜かざるをえなかった。舞台の裏方たちが一生懸命次回の上演のための作業を行っており、展示会参加者たちは展示物の作業に向かっている。仕事をしていると、時間がすぐに過ぎてしまう。もうすでに3ヶ月がふたたび過ぎたので、その分終わりに近づいていることになる。

第3巻第4号（1916年4月9日）

スポーツ愛好家たちは先週あれほど頻繁に身体を動かせたというのに、今週は物足りない思いをすることになった。日曜日に運動場にやって来たところ、電気会社の作業員たちが電線や道具類をそこに広げていたために、ゲームをするなど問題外であった。日本人将校が商業学校の校庭に案内してくれたが、そこではファウストボールとシュラークバルを何組か行えるだけの場所があった。その帰途、偶然にもシュレーダー牧師と再度あいさつを交わすことになった。その日の午前中に、非常に信仰を深め、とりわけ心に深く刻みこまれるような説教をしていただいたのだが、その言葉は、本当にわれわれの置かれている状況にぴったりのものであった。月曜日と火曜日は、運動場で電気工事の作業員たちが祭りをしていて、競技ができなかった。その次の2日間は日本の祝日に当たるため競技は休み、そのかわり津田の丘への外出が行われた。これらの日に祝われる節句の雛祭は、日本の主な祝祭5つのうちのひとつである。何週間も前から数多くの店に、ありとあらゆる人形が展示されているのが見られた。それらはたいてい昔の日本の衣装をまとっていた。祝日の間、市民たちの大半は遠足をする。眉山の遊歩道が、もっとも多く選ばれる行き先のひとつである。収容所からも遊歩道が散歩者で埋まり、展望の利くところやもちろんお茶屋の中や周辺にも、祝日をたのしむ人々が集まり、「精神的」かつ肉体的な楽しみにひたっている。いつもは人の少ない眉山の山頂にも、元気な登山者の姿も見られた。収容所の横をいくつもの集団が通り過ぎたが、かわいい若い人が本当に多かった。暖かい気候のために羽織などを脱いでいて、彩りゆたかな帯と着物を着た優美な女性が幾度となく姿を見せた。散歩を楽しむ人たちは、必要な食料を携えていて、ご飯とおかずの入ったいろいろな色彩のベントー箱を手にしていて、ベントー箱にはさらに、水か茶の入ったひょうたん又はそんな形をしたガラス瓶がぶら下がっている。大人たちはたいてい、この国で飲まれているサケ（酒）を楽しみに加えている。

故国からの郵便は、途絶えたままである。ただこの間に今月と先月分の「賃金」（義援金）が届いて、支払いを受けた。木曜日には、最初のツバメが飛来した。これが夏の兆しであると良いのであるが。

自然愛好者にとっては、昨日の日ノ峰*（またはサンケイとも呼ばれる）への遠足は特別に楽しいものであった。比較的単調な津田までの道はみんなが十分に知っているところであるが、そこからいくつか橋を渡り、水路に沿って木におおわれた山に入り、山を越え、まだ土を起こしていない稲田の中を通過して、小松島の北にある一番高い丘に立てられた神社にまでたどり着いた。通ってきた道はほとんど疲れるほどのものではなく、次から次へと新しい風景を展開してくれる。神社からの展望は、おどろくほどであった。すぐ足下には、松に縁取られた湾に望む小松島がある。何人かはつらそうに、1年半前にわれわれが上陸した場所へと視線を向ける。おそらく、再びそこで帰国の途につくことになればと思っていたのだろう。

小松島から徳島に到る間には、多くの水路の横切る緑の平野に村々が横たわり、中津峰から眉山に連なる様々な姿の山地がそれを半円形に取り囲んで印象深い。北には陽光を受けて海がキラキラ光り、風にわずかに波立っている。

小休止の後、人里離れた大神子^{おおみこ}の海岸へと下りていった。ここはおそらく、われわれが行ける中で最も美しい場所である。高い松の林が浜のすぐ側まで茂り、半円形の入り江の両側は山と荒々しい岩礁に囲まれている。詩情など無関心の連中は、持参した食べ物をほおぼり、長い昼寝を取った。ひょっとしたら、松の梢のざわめきと打ち寄せる波の音を聞きながら、夢にふけていた者もいたかもしれない。

帰り道は、低い峠を経てふたたび来た道路に戻り、約2時間で収容所に到着した。好天に恵まれ、うすく雲がかかって、暑すぎる日光をさえぎってくれた。昼頃になって強い東風が吹いてきたが、背中に受けたので、あまり嫌なものではなかった。遠足の参加者は約100名で、収容所全員の内の半数でしかない。他の場所ではおおよそ提供されることのない、数時間にしろ俘虜であることを忘れられる、このような機会は誰にとっても歓迎すべきものと思われるのだが。このような遠足の機会は、それほど頻繁ではなくなるかもしれない。もうすぐお日様が、だめだと言う季節になるのだ。

第3巻第5号（1916年4月16日）

長らく待たされたが、やっと故郷からの郵便がどっさり届いた。輸送期間が長かったのとロシアの検閲印が無い点から考えて、アメリカ経由で来たものである。実際新しい新聞のひとつには、日本収容の俘虜への郵便物は将来オランダ-アメリカ経由で送られることになるという小さな記事が掲載されていた。輸送期間が長いために必然的に長い空白期間生じたわけで、それが無くなった今これからふたたび定期的に郵便物を受け取れることを期待できるであろう。

* 徳島市と小松島市の境に位置する低山。

今週は、運動場に出かけたのは1回きり、体操は2回とも悪天のために中止となった。月曜日と火曜日の嵐の間、多数の漁船がここの港に避難してきた。

空気はときどき黄味がかったもやに包まれた。これは、アジアの砂嵐によって遠く海を越えて運ばれてきた、非常に細かい塵^{ちり}だそうである。

桜はいま満開である。当地には、広い花の海となるような大きな林はない。並木やちょっとした木の集団のみである。一番多く桜があるのは、町を望む眉山の遊歩道である。薄紅色の帯が、はっきりと暗緑色の広葉樹や針葉樹から浮き上がって見える。夜には明かりの帯がこちらにまで下りてくる。木の枝に、提灯がぶらさげているのである。それというのも、暗くなっても桜見物の人があるからである。自然から提供してもらえないものは、いずれにしろ飲み物の出店がたくさんあって、そこで買えるのだ。

日曜日の夕方は、救援委員会からの贈り物としてザウアークラウトとソーセージという祝祭料理をいただいた。残念なことに、缶詰は開けないままずっと並べて加熱したので、開ける時に中身が一部飛び出すことになった。が、それを除けば、みんなキャベツを気に入ったのであった。

日曜の夜の娯楽として、寄席が催された。これは7時半から10時半までかかり、これには検閲官殿ご自身もたまたま、公演が終わるより先に姿を消す方を選んだ。観客の方かというと、終了時の多くの人の安堵のため息から判断するに、終わって嬉しかったようだ。広間に寝泊まりする連中にすれば、終了までじっとしている他にしようがないのだから。公演の第一部はほとんど反響が得られなかったが、第二部の方は本当に楽しいものだった。一晩にはこちらの方だけで良かったのではないか。

大阪収容所の火災によって、防火対策の措置がより厳しくなった。家*の所有者は家を6時には閉じて、監視将校に家の鍵を渡さなければならなくなった。ところで個人持ちの家は、展覧会までの寿命しか許されていないそうである。

寝坊には非常に辛いことに、数日前から起床と朝の点呼が半時間早くなった。

第3巻第6号 (1916年4月23日)

桜の花は終わろうとしている。先週の初めには、その衣装を余すところ無く広げ、若いも若きも、いたるところハナミ(花見)に繰り出していた。もちろん日本人は、花見を桜の花の下で美の鑑賞だけにふけることとは思っていない。ハナミは、たっぷり酒を飲みながらの陽気な宴と直結しているのである。

日の光と暖かい雨によって、今や葉が一枚も無かった木にも薄緑の芽が生え、麦には穂が出そろい、バラックの後ろの生け垣のカラタチは花をつけ、中庭のクスノキの梢には秋と勘

* 収容所敷地内に建てられた個人所有の小屋のこと。一種の「別荘」として使われたようだ。

違いさせるほどの若葉の赤い色が輝き、アマガエルがおずおずと最初の合唱を始めている。戸外で日向にいるのはまだまだ快適である。体操選手たちは好天に恵まれて熱心に練習していて、驚くほどの進歩を見せている。体操していることが邪魔になると感じている者は、誰もいないようである。というのも練習場所は、体操に関係ない者が散策をする邪魔にならない所にあるからである。これに対し、ボールを打たれるのはかなりうっとうしい。絶えずボールやラケットに当たる危険があるのだ。収容所の中庭はテニスコートではないし、手足の運動を行う機会は十分にあるだから、ほんの数人の愛好者しかいないボール打ちスポーツが禁止されても、誰の損にもならない。

木曜日に、鉄道鉄橋の上流の対岸に社屋のある共同汽船会社が稲荷祭を催した。稲荷とは一般に田畑の実りの神であり、それ故とりわけ農民から崇拜されているが、商人も時に守り神としている。祭りは歳の市の趣があり、社屋の前には出店が立ち並び、進入路には赤いアーチ門〔鳥居?〕が立てられ、屋上にはおそらく雲を表すシートが置かれ、その上には飛行機が一機浮いていた。一団の漁船が川を上ってきて、祭りに加わっていた。夜の打ち上げ花火、吹き上げ花火などで祭りが締めくくられた。

ヤーコブにとって、起床時間はまだまだ遅すぎるようだ。空が明け染める時間にはもうぴょんぴょん跳んできて、起床時間前にベッドから人を追い出し、二階までも上がっていく。彼は愛されてもいるし、怖れられてもいる。というのは人が油断した隙をとらえては、また何かしらいたずらをやらかす。盗みと破壊が大好きなのだ。今は、植えたばかりのものを荒らしたために、庭師と悶着を起こしている。一番いいのは、どこかに閉じ込めてしまうことだろう。

復活祭が目前に迫っている。木曜日に受けた義援金は、この祝祭へのよき序章と見ることができる。この祝祭日にはさまざまな催しが予定されている。第1日目の朝には、大展示会が開催される。画家たちは今も、展示物にふさわしい外観を与える作業の最中である。午後には第1回庭園コンサートが開催される。第2日目には遠足をして、卵探しもすることになっている。ミサは、残念ながら行われぬ。しかしシラー牧師が、4月28日に訪れることになっている。天気がある程度良ければと、願うばかりである。それに戦争の良い知らせが届いたなら、復活祭の喜びにそれ以上付け加えるものがないのであるが。こういった意味で、良き復活祭を皆様方に願う。

第3巻第7号 (1916年4月30日)

収容所にとって、つらい出来事があった。からすのヤーコブが、復活祭の初日に姿を消したのだ。ここで一番気分良く暮らせた当の彼が、ここを去らねばならないとは。学校の横の道を歩いている時に、荒々しい手に捕まれ、縛られて、どこか知らない運命の地に連れ去ってしまったのだ。彼の行方を求め手をつくしたが、むなしく終わり、彼のことはあきらめぎ

るを得ない。新しいきれいな鳥かごが、彼のために用意されていたが、ひょっとしたらそこから逃れたかったのかもしれない。学校の垣根の側の大きな鳥小屋には、鷹が唯一の住人となって暮らしている。ヤーコプの代わりはすぐに見つかった。卵探しからの帰り道、子供たちが巣から落ちたからすの子を持ってきたので、連れて帰ったのである。そのからすの子は、熟練した人の手によって世話を受け元気にしている。

復活祭の祝日は、順調に推移した。最初の日は、一日中曇っていたものの、庭園コンサートは開催できた。ただし気分的に、湿っぽい天気の影響を受けたが。第1日目の展示会が大成功であったことは、今は言及するだけにしよう。他の場所で報告されていることであるので。第二日は、お天道様がもう少しましな天気を意識してくれたみたいで、予定の卵探しを行うことができた。眉山の脇尾根の、平野にせり出しているところで卵の隠れているのを見つけることができた。この後さらに、鍋たたき、スプーンレース、二人三脚、瓶通信などの愉快なゲームを楽しむことができた。選手、観客ともども他の全てを忘れ、愉快で無邪気な娯楽に興じさせてくれる数時間であった。小難しい鍋をもう少しのところで打ち損じたり、先頭の者がゴールの寸前で卵をスプーンから落としたり、脚をゆるく結わえた二人組が坂道を転げ落ちたり、一番言うことを聞くはずの馬車馬が瓶をひっくりかえしたりした。一方こんな余興が性に合わない者は、ただ座って、暖かい春のうららかな日の魔法に身をゆだねさえしておればよかった。眼前の世界は大きく広がっていたが、自身は世間から隔絶している感じがした。だが、ここまでにしてしよう。さもないと、自然賛美に没頭してしまいそうになる。

この前の金曜日、地面から激しく突き上げられて収容所の建物が揺れた。この国では、地震はありふれた現象であることを思い知らされることであった。

土曜日に、またしても時間外の点呼がかかったが、全員そろっていた。どうやら異常事態を報告した歩哨は、幽霊を見たようである。

休養をとる必要が大いに生じたために、ある男が火曜と水曜に日本の衛兵所の一室を与えてもらったが、戻ってきてから明かりが暗く、食事も不十分と文句を言っていたので、彼を第1号として真似をする者はほとんど出ないであろう*。

靴の修理は、今後収容所内で行われることになり、新品の靴も作られる。以前の穀物運搬器具置き場が製靴作業所に模様替えされたのである。

シラー牧師がおととい、復活祭のミサを挙げられた。これに引き続き、聖餐式が大勢の参加者のもと行われた。夕闇の中、共同丸の船上の人となった牧師に、手を振って別れを告げたのであった。

* 衛兵所の中には、営倉が設けられていたのである。俘虜たちはこの営倉を皮肉って喫茶「衛兵所」と呼んでいた。

第3巻第8号（1916年5月7日）

五月になった。そうとは知らなかった者も、大広間に移された日曜日の庭園コンサートを聞いて、実感することができた。自然界はドイツよりもずいぶん先をすすみ、暖かい気候とたっぷりの雨で植物の生長が非常に進んでいる。今は、ツツジとフジの花の季節である。週に何度か、運動場に通うたびに途中通過する公園では、ツツジがピンクと白の花を咲かせている。池のそばの藤棚は、青っぽい花と白い花の房で無数の昆虫をご馳走に誘っている。横の一番大きな木に巻き付いているフジもあって、その木から花がふさふさと下がっている。春の長雨の季節は終わったようで、雨の残りはたっぷりあり、蚊と蛙にとってはおあつらえ向きとなっている。毎夜近くの田んぼから、この四つ足の歌手たちの単調な合唱が聞こえてきて、まるで寝ているわれわれを打ち負かそうとしているみたいだ。

小包と新聞がアメリカ経由で新たにどっさりと届いたが、手紙の方はぼつぼつとしか来ない。しかし、これにはだんだん慣れてきた。手紙は確かにわれわれの確信を維持するのに重要な要因であったが、他の国々にいる運命の同胞たちがわれわれ以上に大変な目に会っていることを考えると、手紙が来ないことも何とか慰められるのである。

新任の山口師団司令官が、火曜日に収容所を視察に訪れた。短い演説を行い、全員俘虜の期間を我慢強く耐えるように訓示した。

酒保では、商店の大集団がやせ細り、たったひとりになった。開店しているのは数時間であるが、売り上げが少ないのでひとりで十分なのだ。入ってくる義援金はますます少なくなり、肉屋の売り行きが増大するにつれ、酒保にはかなりの損害となっている。

体操団は、もうひとつ器具を導入した。これはきわめて単純な材料を使い収容所内で組み立てられたものであって、少し古風な印象を与えるものだが、まごうかたなき鞍馬である。体操の時間は気温が高くなってきたことを考慮して、1時間早く設定されている。

鳥の飼育は相変わらず盛んで、いたるところで鳥が動き回り、ぴーぴー鳴いている。ただ、からすの子だけはネズミの餌食になって、早死にしてしまった。

故国から新聞がたくさん収容所に届くようになった結果、トクシマ・アンツアイガーの主要な役割である故国の新聞記事の中から特に興味深いものを再録するという役目が奪われてしまった。再録した記事は読者にとって、たいていどこか別のところで読んだものになっている。そこで編集部は、故国の新聞記事の再録を止めることに決定した。これによって紙面に掲載する内容が減少することになる。この減少に見合うようにするため、本紙を今後2週毎の発行とすることになった。残念ながら、これが収容所からの解放に伴う発刊の停止に到る経過であると期待するのは時期尚早である。

第3巻第9号 (1916年5月21日)

町中に男児の祭（端午の節句）のための高い柱が立てられるのを見るのは、これで2度目となる。1回目からもう一年も経つとは、信じられないぐらいである。男児の祭の日は5月5日であるが、このような田舎では旧暦に従うので、約2週間遅れとなる。男の子たちは祭りの日の親類や友人から沢山の贈り物をもらう。武器、旗、鎧兜、戦争ゲーム、おもちゃの武士人形、とりわけ布や紙でできた鯉。この鯉は、男児が鯉のようにあらゆる障害を乗り越え、前進するよにという思いを表す。去年男児が生まれた家庭では、先端に松の枝を取り付けた竹竿が立てられる。その柱には、贈られた布や紙の鯉が上げられ、それが風を受けて膨らみ、泳いでいるかのように見える。

この2週間にも、さまざまな気分転換が提供された。第1週目は、毎日運動場に競技をしに出かけた。それから日曜から水曜まで、体操団の競技会が開催された。これは中断することなく行われた。心配していた雨は、古参組の重量挙げでもって全種目が終了した後に降り出すという心配りをしてくれた。午後に予定されていた体操競技はもちろん中止となった。授賞式は夜に行われ、その後楽団の小コンサートがあった。体操には大きな関心が寄せられ、大勢の観衆が個々の演技を批評家の目の眺めていた。

ことは蚊が異常に早く、大量に発生した。今は刺されてもまあ何とか我慢できるが、暑い季節に向かってとんでもない見通しになりそうだ。もうすでに蚊帳が、ベッドの上に張られている。しかし血に飢えた厄介者は、隙あらば這い込んでくるのである。

川では今、中学生たちが熱心に競漕大会のための訓練を行っている。その際大事なことは、大声を上げることらしい。血の気の多い悪童が何人か、もう泳いだり、水をはねたりして楽しんでいる。われわれにとってはおそらく今年も、水泳禁止が続くのだろう。演劇集団が先々週、ルートヴィヒの「世襲森林監督官」を舞台にのせた。筋が面白く、演技の良さと巧みな演出によって観客の心を捉えていた。ただしその効果は私には、われわれの期待とはかけ離れた劇の結末によって、表面的なものになりはしないかと疑問に思われる。

第3巻第10号 (1916年6月4日)

5月が終わった。風は強く、雨は少々。だが結構涼しくて気分よく過ごさせてくれた。どの旗竿にも、丸い口をした布製の鯉が重たげに揺れている。どの鯉も、そのほかでかさで他の鯉を凌ごうとしている。野外では小麦と大麦が実りを迎え、学校の井戸ではもう井戸さらえが行われている。収容所の花壇も、庭師の期待に時として応えないものもあるが、華やかになってきている。たくさんのヒナたちがおいしそうに育ってきている。数人の犬の愛好者が、ふたたび新たな犬を育てている。この犬どもはすでに、夜の犬の遠吠えコンサートでもそれと分かる声を身につけようとしている。カブトは相変わらず、衛兵のラッパに合わせて

とてもすてきな遠吠えをしている。彼は、もともと暮らしていた中学校よりも収容所の方が落ち着くらしい。歩哨たちは夜中、彼を相手に銃剣の訓練をしているらしく、立て続けに2回、刺し傷を受けていた。運動場では走路がきれいになり、周りに観客席が作られた。近々、そこで自転車競争が行われるのだろう。われわれが行っているファウストボールとシュラールは、観客がますます増加している。若者がときどき一緒にやりたくなるようだ。小さなちびどもが、大きなファウストボールの球を追いかけ打とうとするが、周りの人たちから笑いを誘って、大きな球がゲーム中に見るほど簡単には扱えないことを思い知るのである。ゲームの他に体操も熱心に行われていて、身体を動かすことにかけて全く不足はない。精神的な栄養については、新設の図書室でたっぷり取ることができる。本棚にずらりと並んでいる様子は、まさに堂々たるものである。別荘地はまたまた大きくなった。建築を予定しているものは急がないと、もうすぐ建築できる場所が全部なくなってしまう。シュレーダー司祭が水曜日（5月31日）、収容所内でミサを執り行った。彼は収容所に積極的な関心を示し、お役に立てることは、できる限り何でもするとおっしゃっている。

キリスト昇天の祝日に、中津峰の北斜面にある観音寺*への一日がかりの遠足が行われた。午前6時半、素晴らしい陽光のもと出発した。那賀川**までは、所々まずまずの田舎道と、大麦畑と田んぼの間の面白みのない平野の中を進んでいった。農民たちは大麦を刈り取ったり、稲の苗植えのために田んぼを準備しているところであった。那賀川〔勝浦川〕沿いに、立派な杉と松の林の中、数多くの墓に囲まれて丈六寺という寺がある。ここは封建時代すなわち武士の時代に戦場であって、寺院の脇の建物の一つでかつて、ひとりの大名が殺されたこともあるそうだ。この寺から道は、最初小さな丘の連なり沿いに、それから両岸に竹の生えた潤れ川沿いに進み、その後谷を横切って高い中津峰山系の麓に向かってまっすぐ進んだ。深く切れ込んだ谷からは小川がさらさら音を立ててながれていた。その傾斜を利用して、米つきの水車がいくつもあった。道はほどほどの傾斜で寺の方へうねうねと上っていく。ほとんど常に日陰になっていた。たいてい、対岸斜面の暗いうっそうとした森と灰色の岩壁を見通すことができた。多くの参拝者たちを追い越していったが、たいていは女性で、途中にある観音像すべてにお供え物をしていた。2つの踊り場のある急な階段を上ると、寺の真ん前に出た。寺は立派な針葉樹が日陰を作る台地に建てられている。一番の興味を引いていたのは、8,8cmの観音で、日清戦争のときの戦利品だ。もうひとつ、高い一本杉に刻まれた観音像も言及に値するものだ。像は1mほどであろうか。木の方はそれでも生長を続けている。山上では思い切り休息する十分な時間があった。ここまでの所要時間は3時間半だった。近くの滝までの寄り道は、それだけの価値があった。約20mの高さから、比較的強い水流が泡立ちながら周囲を緑に囲まれた暗い岩壁を澄んだ水をたたえた滝壺に流れ落ち、それから

* 中津峰中腹にある如意輪寺を指す。本尊は如意輪観音。

** これは明らかに勝浦川のまちがい。那賀川は中津峰のさらに南を流れている。

岩がごろごろある所を下の谷の方へとぎあざあと流れ下っていくのである。昼からは空に雲が出てきたので、帰り道には日焼けを心配せずすんだ。こうして全員、割合元気に収容所に到着した。私は最初、この遠足が行き帰りにはかなり長時間歩かねばならないので、参加する気はほとんどなかった。しかし後になってみると、行ったことを嬉しく思っている。遠足はこれからも常に、私にとって好ましい記憶を形作ってくれるだろう。

第3巻第11号（1916年6月18日）

私がこの前、このコラムを執筆していた時、それが最後のものになるであろうと思っていた。逃亡を企てていたからである。2日の夜、収容所を抜け出し、日本人に変装してセイミ丸に乗船した。あいにく、そこで外国人であることがばれ、否応もなく収容所に連れ戻されたわけである*。30日の拘禁と減給1ヶ月がその代償であった。そんなわけで、私は自分の持ち場に戻り、平和が来て、ペンを止める日が来るまでコラムを書き続けることにする。

この逃亡は失敗したものの、当然ながら収容所への影響なしにはすまされなかった。たくさんあった生け垣の穴は全てふさがれ、歩哨が垣根沿いに歩けるように、また見通しが良くなるように出店と鳥小屋は垣根から離され、点呼は朝の6時半と夜の8時半に設定された。こうすれば汽船の出航には間に合わないからである。

聖霊降臨祭が過ぎた。ここでは、祝うと言えるほどのことはできなかった。聖霊降臨祭でいちばんの驚きは、永らく絶えていた故郷からの郵便の到着である。たくさん届いた手紙は、確かにもう何ヶ月も前に出されたものではあったが、でもやはり貰えるだけで嬉しいものである。もちろん、手紙はこれから数ヶ月、また来なくなることを覚悟しなければならない。天候は再び不安定になり、スポーツ競技会を始めたものの、一時中断しなければならなかった。日中の気温は、常に25度を越えるようになった。夜はまだある程度涼しい。今はちょうど、満月である。魔法のような月光がまるで昼のように光をひろげ、単調な蛙の合唱が聞こえる中、夜中の散策へと誘う。空を泳ぐ鯉は姿を消し、竹竿だけが庭にによっきり立っている。その代わり、四角い凧が夕空に上がっている。川にはしばしば、日よけに青いカーテンをした船が現れる。船に乗った人は、非常におかしな仕草をし、収容所の方に手を振り、それに応えてもらおうと喜ぶのである。この人たちは、もうこんなに長い間ここに拘束されている、哀れなわれわれ俘虜を同情してくれているのだ。先日、日本の陸軍省の将校による収容所の視察があった。どうやら、まだ長時間ここにいななければならないと踏んでいるようだ。視察によって、なんらかの改善がもたらされるということはないだろう。われわれは日本の状況から見て、非常に良い暮らしができています。ただ、夏に海か川での水浴が許されるのを期待したいところだ。

* この事件は当時の新聞記事にもなり、またその顛末の詳しい報告が公文書として残っている。『トクシマ・アンツァイガー』では記事に署名がないため執筆者を特定できないのだが、この事件のおかげでこのコラムの執筆者はエルドニス経理秘書官（少尉待遇）であることが分かった。

第3巻第12号（1916年7月2日）

最近の鳥類数調査によれば、収容所には鳥小屋が10で、ニワトリ109羽、アヒル28羽、ハト6羽の合わせて143羽いる。鳥の飼育の成功で、新しく飼育する人がますます増えている。ただし残念なことに、鳥たちは狭い柵の中で歩き回らねばならないので、空間不足から道路にまで出て行くものがある。かわいそうな鳥がもう少し自由が得られるように、中庭の一部を区切って鳥用の垣とした方がいいのではないか。すばらしき雨の天候がこの調子で続いたら、中庭はそれほど利用できるものではないし。若いアヒルにとってはこの天気はうってつけのようで、無数の水たまりが恰好の遊び場になっている。生き生きと動き回る様子に、数多くの人が引きつけられて眺めている。

庭の植物にも、この天候は好結果をもたらしている。カボチャの蔓はすでに四阿^{あずまや}の屋根にまきつき、キュウリはふくらんできて、背の高いヒマワリは本当に森のようにになっている。建築作業が進み、収容所の様子が大きく変わった。衛兵所が増築になって、そこで誰もがすきなようにシャワーを浴びたり、身体を洗えるようになった。面倒な水運びがなくなった。この改築は、ちょうど風呂のボイラーがまた修理に入っているだけに、まさしく時宜を得たものであった。

安全性確保のために、垣根に新しく電灯が2つ付けられ、新しい歩哨も置かれた。先週、小松島に日本の戦艦石見^{いわみ}（旧露ポリエーダ号）が停泊し、一般に公開された。収容所の向かい側にある、富田川*のはしけ乗り場には艦に乗りたい人々が押しあいへしあいしていた。巡査たちは、帆船や動力付きのボートへの乗り込みの整理と、乗りすぎを防ぐことに大忙しであった。ここでもまた、アジア人の控えめなところに感心するのであるが、暑い中何時間も船に乗れるのを待ち、船に乗ったで、ぎゅうぎゅう詰めになって運ばれて行くのである。もちろん、みんな扇子を持っていて、手を休めることなく扇いではいるが。

スポーツ競技会は最後まで挙行できた。月ごとのミサは、カトリックについては金沢のフランツ・フィンガー司祭によって、プロテスタントについては6月22日に宣教師のシラー博士によって執り行われた。---夏になって、収容所でのふつうの服装というのが、ズボンとシャツだけという恰好（これはこの国ではありふれたことだ）なので、服を消費するということが少ない。ところが、服が足りないという者がちよくちよく出てくる。なぜなら、先ほどの服装は外出にはやはり不向きだからである。義援物資については、靴と下着の配布があった。

* 収容所のすぐ裏手、北側を流れる新町川のこと。当時の地図でも「新町川」と記されている。世間一般では「富田川」と称されていたのだろうか。

第3巻第13号（1916年7月16日）

先月の逃亡の企ては、どうやらお手本となってしまったようで、エーベルツ兵曹も垣根を抜けて逃走をはかった。彼はそう長く黄金の自由を味わうことはできず、翌日には追跡者の手に捕まった。残念なことに、ニッセン、ケルナー両海砲兵がこの事件に絡んでいた。彼らに対する審決は、近々言い渡される。この企てはまたしても、予防的な警戒措置が強化される結果となった。10時以降は、誰も中庭に出ることができなくなり、垣根に沿って1mの間隔でワイヤが張られ、誰もそれを越えて出てはいけなくなった。私服及び着物はすべて提出を命じられ、その後トランクや箱が秘密に保持しているものがないか、あらいざらい調べられた。処遇について、厳格な措置が幅を利かすことになりそうだ。たとえば、もうすでに誕生パーティの犠牲者が点呼の際の欠席したため、喫茶「衛兵所」で数日間の宿泊を科せられた。まあ、ひどくはなるまい。ひょっとしたら近い将来解放されるかもしれないという希望があれば、どんなに耐えがたいことも容易に耐えることができるのだ。

雨の季節が終わった。ほんとうに十分降ってくれた。そのおかげで、気温はなんとか耐えられるところに止まっていた。今は雷雨が頻繁に起き、夜には遠い稲妻がぼおつと照らし出される雲の向こうでひらめいている。日の入りを見ることはほとんどなく、ほんの時たま、夕焼けの色の変化が青島での日没の燃えるような色彩を思い出させてくれる。

富田川〔新町川〕はまったくの市民水浴場と化した。学校が終わるや、水泳に適した場所は、どこも日焼けした腕白小僧たちの一団が泳ぎに来ている。着ている衣服はたいてい明るい色の着物だが、それを大急ぎで脱ぎ、水泳パンツなど不要、そのまま暖かい水の中に飛び込み、そこで心行くまではしゃぎ回り、帆船やその救命ボートによじ上ったりといろいろな悪さをしている。誰もこの無邪気な行動をとがめ立てする者はいない。それにしても、うちの若者たちは何とみじめなことか。水泳への欲望をありとあらゆる禁令によって制限されているのだから。あのように眺めていると、いっしょにやりたいという気持ちにとてもなる。しかし水泳は許されていない。そこでこの前の日曜日のにわか雨の折、初めて冷水浴療法を試みようという連中が中庭にぞろぞろ現れたように、雨を天然の水浴として利用するわけである。

文化（それとも文明？）の恩恵が徳島にもどんどん広がっている。ガス会社が営業を始めたと思ったら、もうガスが広告に使われるようになっていく。アドバルーンが毎日空高く上がり、そこに書かれた文字で驚き顔の市民たちに、一番良い靴下は何かを教えている。夜になると、照明をつぎつぎに変化させて人々の注目を集めている。

7月10日、フンツィカー牧師がプロテスタント教徒のためにミサをあげた。彼の説教は大きく関心を引くものであった。というのも彼は中立国、スイスの人だからだ。今回彼は、戦後において全てのキリスト教徒による共同作業が不可欠であることを説いた。これは、平和が手に取れるほど近づいているのではないかと思わせる説教であった。実際、敵国側が最後の攻撃に共同してあたることによって、戦争に決着を付けようとしているかのごとく思われるのである。

第3巻第14号（1916年7月30日）

犬の歌手「フェリックス」が、外で何度も追っ手から逃れたあげく、収容所から連れ去られた。残念ながら彼を連れ戻すことはできなかった。われわれ皆、この元気のよい犬を失って残念に思っている。修業時代に殴られたことが効いて、決して夜中にキャンキャン鳴いて安眠を妨害しなかったし、徳島の犬が皆一斉に吠えても、彼の声をそこに聞いたことはなかった。外見は、最初の縮れ毛の子羊から直毛の栄養の良いヤギに変身した。ねずみ取りにかけては、師匠で遊び友達のカブトより上手であった。カブトはいま、いなくなった仲間を悲しんでいるかのように、ふさぎ込んだ様子でうろつき回っている。木工所にひっそり暮らすトニーもほどなく姿を消し、フェリックスと同じ運命をたどることだろう。こんなにすぐに犬のことを書いたのは、犬の日々*のせいだ。熱暑にはまったくうんざりする。日本人も炎暑を避けて朝のうちに海に出かけ、夕方になってから戻ってくる。彼等は一般に最も暑い期間だけ戸外で泳ぐのである。

7月25日、富田川は記念日、いやむしろ記念の夕べであった。というのも昼間の間は、そもそも祭りがあるのかどうか疑われるほどであったから。夕方頃になってようやく、鉄道橋の上手に何台かの荷車がやってきて、あつという間にいくつもの屋台が並び、花火の準備がなされた。夕暮れになると、大きな橋の近くに提灯をさげた無数の船が集まってきた。9時頃、きれいな花火に点火されてから、色とりどりの明かりをつけた船が動きだし、ごちゃごちゃと交差しながら中学校のところまで川を下り、またそこから戻っていくのであった。何艘かの船は、石油で炎を大きく上げて川面と兩岸を明るく照らしていた。両側には、観客が幾重にも列をなして集まっていた。音曲は太鼓とホラ貝の音に変わった。歩哨はその晩、特に熱心に垣根沿いに道路をさぐるように巡回し、悪賢い奴がこの機会を利用して外の雑踏に隠れることのないようにしていた。しかし、おそらくそんなことを考えるものはもはや誰もいないだろう。とりわけ最近、衛兵全員の銃剣演習を目の前で見せつけられたので、これから先、歩哨は反抗的な人間や脱走者をこの武器で正気に返らせることになるだろう。そうせざるを得なくなったのだ。この前、個人対決のつかみ合いでは衛兵の方が目にあぎをこしらえて退散したからである。勝った方の男は、2週間の営倉がもうすぐ終わる。

第3巻第15号（1916年8月20日）

何週間もの審問の末、エーベルツ予備役砲兵曹は逃亡未遂で3ヶ月の禁固に処せられることになった。ちょうど今は一番暑い季節で、教科書などの類を勉強や娯楽のために渡されているとはいえ、この刑期をやり過ごすのは大変なことであろう。連座していた者は幸い軍法会議を逃れたが、ニッセン海砲兵だけは別で、たぶん実行を先のばしていただけないのに、4ヶ

* ドイツ語で Hundstage。7月23日から8月23日までの盛夏のこと。

月の禁固を食らった。審判は善通寺であり、約2週間かかった。被告たちはその都度、高松の拘置所から審問に呼び出されたのである。高松への山越えの旅行はふだんはとてもすばらしいものであっても、そのために1週間以上1.70×1.70mの独房に入らねばならないとなると、そんな旅行はする価値のあるものではない。取り立てて身体の大きくないヴェルナー副曹長でさえ、独房では窮屈だったと言っている。

8月6日、かなり強烈な地震が毎日同じように過ぎていく生活を襲った。収容所の建物の梁は、折れ曲がりしななかったが、目に見えるほど前後に揺れていた。この国では地震は稀なことではなく、1914年1月にも九州が地震と火山の噴火に見舞われたところである。日本に地震が多いことの説明は、次のようになされている。太平洋は地殻の沈み込みによって生まれたものであり、その周辺部に日本列島がある、ここは今も地殻が大きく破裂し、沈み込むゾーンを形成していて、未だ完全には固定していない。地殻の沈み込みには当然ながら地中に大きな空洞の存在が前提となるが、沈み込みの度に揺れが生じ、それが地表では地震として感じられるのである。

このところ、昼も夜もじつに騒がしい。静かなときでも、船の汽笛、汽車の汽笛、犬の鳴き声で相当神経にさわるのだが、それに三味線のペンペン鳴る音、鼓の音、やかましい拍手と万歳の声加わるのである。これを見れば、東アジア人には神経がないことが分かる。浮かれた連中がむちゃくちゃ大騒ぎしながら真夜中に町中を遊覧船を走らせても、誰も何とも思わないのだ。この騒がしい船による遊覧が徳島での死者を記念する踊り*の最後を飾るものらしい。収容所でも、その横手をいくつか踊り手の一団が通っていったが、その幻想的で、一部華やかな色の衣装と音楽からはほとんど死者を思い起こさせるものはない。

月光の奇妙な作用については、これまでしばしば書かれてきた。日本の秘密警察もその言によれば、毎夜ひそかに川岸の電柱の影に隠れているそうだが、日曜日の夜の満月にその作用を受けたにちがいない。ひょっとしたら幽霊を見たのかもしれない。突然衛兵に警戒態勢を取らせ、点呼のラッパが鳴った。垣根沿いの歩哨が二倍に増え、建物の入り口はすべて衛兵が見守り、鳥小屋とウサギ小屋まで調べが入った。もちろん、誰もいなくなっていなかった。退去の時、危うく腕力沙汰になるところであった。監視将校が、就寝の命令を前もって発する前に、力づくで人々を中庭から立ち去らせようとしたからである。

収容所の肉屋は、私企業から公共機関に生まれ変わった。もちろん皆の期待するのは、もっと少ない金でソーセージがもっと多く買えることである。ソーセージは、それを消費することによって公共へのささやかな奉仕となると考えるだけでも、味が増すというものである。収容所の健康状態は従来何の問題もなかったが、残念なことに、この大変な時期に赤痢が一例生じた。それ以上変わらなければよいのだが。コレラは、日本の各地の港湾で勢いを増し

* 盆踊りのことをこのように解釈し、表現している。

ている。幸い当地のような遠隔の島への伝染の恐れはあまりない。

ところで、本紙記者の一時的な不注意によって、本紙の発行を1週遅らさざるを得なくなった。

第3巻第16号（1916年9月3日）

ふさぎ込むというのは、私の趣味ではないが、この数週間のさまざまな不愉快なことを思い出すと、自分の楽天主義を思い切り発揮しないと気分が落ち込みそうになる。

この前の視察によって日本の陸軍省は、ここの空間的な状況の狭さを考えると、暑い時期には人々に戸外での水浴という形である程度涼ませる必要があることを納得した。そこで再び、水泳パンツが配布され、昇り降りのはしごが取り付けられ、収容所から富田川の下流、約500mに水浴場を示す赤い旗をつけた竹竿が立てられた。その後、実際に一度泳ぎに出かけたものの、翌日にはコレラの危険があるために早くも禁止されてしまった。最初のうち、市内には罹患例が発見されていなかっただけに、これは慎重すぎるのではないかと思われた。しかし日曜日以降、市内にも患者が現れ、その数は日ごとに増えている。このために、外出がすべて禁止され、差し当たり収容所から全く出られなくなってしまった。配達されるものは、すべて事務棟の方で受け取っているのだから、病気が伝染する危険はかなり少なくなっている。

調理長は先月の初めから、腕前の確かなフンピヒー一等兵曹からクランツ兵曹に変わった。食事にあてられる金額が、先月の中頃より減額されている。従ってクランツ兵曹は、どうやっても前任者の料理を越えることはできないだろう。それどころか、それ自体少ない食事がさらに少なくなるだろう。

楽団は、非常に大規模で、立派な演奏であった記念コンサートが終わった後、数週間の休暇に入った。これまでの功績を讃えてその日の午後、小さなパーティが催された。もちろん休暇の間も、楽団員それぞれは上を目指してさらに練習を続けるであろう。

喜ばしいことに、再び故郷からの郵便が相当な数入ってきた。一部日付が3月初旬のものがあるものの、十分に早くやって来た。ルーマニアがオーストリアに対し宣戦布告したので、ここにはもっと居ることになるのを覚悟しなければならない。とはいえ、ルーマニアは早いうちに宣戦布告したものの、戦争が終わる頃に戦闘に加わるつもりでももちろんあったから、戦争は終わりに近づいているという見解を取ることも可能だ。無論その思うには、ちょっと楽天的でないといけないうが。

第3巻第17号（1916年9月17日）

これで4週間、収容所内に拘束されていたことになる。この制約は、収容所内ではゲーム

もスポーツもできないだけに身にしみる。コレラは幸い終息に向かっているそうなので、もうすぐ野外で思いっきり身体を動かすことができるだろう。クスノキの間の短い区間をゆっくりと行ったり来たりするのは、すぐに飽きてしまう。収容所に和やかな雰囲気を出し出す、ニワトリやアヒルの行動につつましく見入っていることもできる。しかし、いったん詳しく知ってしまうと、それをやめるのは難しい。収容所の施設はどんどん改善されていく。まだまだ長期間逗留せざるを得ないのであるから、改善はなんにしろ歓迎できることだ。食事代が一人当たり一日5銭引き下げられたことで、生活が極めて切り詰められたものになっている。およその計算をしてみると、収容所内でパンを製造すれば本質的な節約効果があることが分かった。専門家がいらないわけではないので、近々収容所製パン所が作られることになった。これはパンだけを焼くのではなく、小型パンやケーキへの需要も多くある。これらを販売することによって公共の福祉に役立つ収益が得られるであろう。

パン屋の他に洗濯屋も計画されているそうである。少なくとも小規模ではあるが、いくつか洗濯請負が成功している例がある。日本製石けんの「良さ」を考えると、ドイツ人にはそれらを追放するのはきっと難しくないであろう。

この前の雨の後、気温がぐっと下がり、温度計が連日30度を示していたところに比べて、20度をこえる気温になるともう寒いくらいである。夕方から晩は涼しく快適であるので、今年の夏は峠を過ぎたのであろう。昨年と比べると、われわれの住む木造建築を基礎から揺らしたような本物の台風がまだ着ていない。雷雨もまれであった。この前の雷雨のとき雷が、最近俘虜のためにカトリックミサを行った、スペイン伝道教会*の屋根にあった石造の十字架を破損した。きっとこの事件は、そうでなくてもかなり勢いのなくなった伝道にとって非常に障害になる。

故郷からの郵便の波は引き、家からの郵便を受け取るのはまた何週間も先のことであろう。外に向けた手紙は、従来その回数だけが制限されていたが、これからは枚数も制限され、たった1枚にしか書けなくなる。これまでは大抵のものが目一杯、個々の状況について書いてきたので、重要な事実しか書けないとなると、とてもつらいことになるだろう。手紙を書くのは、思考の交換や授業のために使ってはいけないというわけだ。

* 徳島市徳島本町にある現在の徳島カトリック教会である。

音楽活動について

音楽関係の記事はかなり多いのであるが、今回はそのうち特に「徳島オーケストラ」という収容所内の楽団についての記事を中心に一部を紹介する。「板東俘虜収容所」での音楽活動はつとに知られ、「エンゲル楽団」やベートーヴェンの「第九交響曲」の初演などが有名であるが、それより以前に徳島でもオーケストラが結成され、演奏会がさかんに開催されていたことが、これらの記事から分かる。そのプログラムについては、ほとんどがこの新聞に記録されていて、どのような曲が演奏されていたかを詳しく知ることができる。そこで、プログラムだけをまとめて末尾に付しておく。

われわれの音楽（第1巻第1号、1915年4月5日）

「歌を歌おうよ、ギターで伴奏するからさ」という話があって、日本人にギターを注文したのである。ところが、あいにく彼はドイツ語を解せず、持ってきたものはギターではなく…チェロであった。これが、わがオーケストラのそもそもの始まりである。前々からヴァイオリンは数台あった。それに加えて義援金を使って、さらに何台かのヴァイオリンとヴィオラを1台を購入したのである。こうしてわが楽団ができた。たいていの楽団員は初めのうち、担当の楽器の技術を初歩の初歩から学ばねばならなかった。しかし愛あれば、なし得ないものはない。数週間後にはすでに、多くの素晴らしいことが成し遂げられた。だが、楽器と愛だけではまだ不十分で、楽譜がなければならぬ。大阪で合唱団の結成したときも、楽譜不足が深刻であった。楽器となると、もちろんこのような編成のオーケストラがいつもあるわけではないという点からしても、状況は全く良くない。しかしその代わりに、ここには今あるメロディーを並べ、それに新しいものを追加して作曲する芸術家たちがいる。その点でも多くの楽しいことを期待できるのである。

(以下省略)

復活祭コンサート（第1巻第2号、1915年4月11日）

非常に楽しみなプログラムが並び、いやが上にも期待が高まったが、期待以上のものではなかった。

実際、このように若いオーケストラが早くも一晩を埋める演奏を、それも非常にすばらしく聞かせることができるようになったとは、「事情通」以外のものには驚きであった。

音楽家たちにほんとうに感謝せねばならない。彼らの芸術的才能と勤勉、それから犠牲心によって、今ではモーツァルトの室内音楽を楽しめるまでになっている。俘虜となって日本にやって来たときには、誰もそのようなことはおそらく期待していなかっただろう。

プログラムそのものについては前号で触れたので、演奏が秀逸なものであったことを述べるぐらいしか残っていない。とりわけモーツァルトの四重奏曲は、その演奏の軽やかさ、合奏の正確さに賛嘆させられた。チャイコフスキーの曲に向けられた喝采の大部分は、ソリストの「ハンゼン氏」の力によるものである。楽器を自在に操り、その演奏の柔らかく、豊かな音を奏でて、これからもしばしばソロパートを弾いてほしいという願望が生まれてくる。演奏会が「三つの歌」を再度プログラムに載せたのは、いい考えだった。初回の演奏では、合唱団はまだ練習での「仕込み」が足りなかった。今回も残念ながら、十分な高さにはまでは達していず、素晴らしい「三つの歌」はその効果を完全に発揮するまでには至らなかった。合唱団はオーケストラを手本にし、練習すべきだ。勤勉なくして賞は得られない。

最後に行進曲と舞曲があり、演奏者を増やしたオーケストラが豊かに響き、すばらしいものであった。しかし残念なことに、ここでも前々から感じられていたこと、すなわちコントラバスがないことを身につまされた。まさに舞曲や行進曲では、まずコントラバスによって正しいリズムが作り出されるのだから。この点について、今度対策を立てられることになった。コントラバスを購入しようと（ここではこのような楽器は80円もする！）、その方策を長らく、むなしく探し求めてきたのであるが、わが楽団長は公衆に訴えることを決断したのである。そして見よ。この訴えかけは驚くべき結果をもたらした。募金記名帳が置かれるや、必要な額がすぐに集まり、もうすぐ美しい、ピカピカのコントラバスが到着し、低く力強いベース音を響かせることになっている。

この募金の輝く成果は、オーケストラがどれほど共感を得ているかを、何にもまして明瞭に示している。寄付を寄せていただいた方々に、公共の名において感謝申し上げたい。

最後に、舞台が従来とは違ったものになり、さらに美しくふさわしいものに作られていたことに触れておこう。ただ残念ながら、大きな楽団には小さすぎるものであった。これへの対策として、将来はもう少し大きく改築したほうがいだろう。

第1巻第4号（1915年4月25日）

今宵は、特別の意義のある日で、新しい舞台が初めて供用されることになる。募金が非常に多く（50円以上）集まったことによって、本当にきれいで、大きな舞台を作れることとなった。何日も前から芸術家たちが、板にペンキと布を使って仕事に励んでいて、非常に好調な進展を見せている。全てが今晚までに完成しているとよいのだが。

時代にふさわしい、愛国的な作品でこけら落としができるのが良かったのだが。舞台監督から聞いたところでは、そんなに直ぐに適当な作品を手に入れることはできないとのこと。そのかわり、プログラムの第1部に特別に重きを置いたのである。

新しいカトリック伝道教会の献堂式（第2巻第8号、1915年11月14日）

先週の日曜日はわれらのオーケストラと合唱団にとって意義深い日であった。はじめて「客演旅行」をして、収容所の外にもその芸術を示す機会が与えられたのである。

当地のスペイン宣教団を率いるアルバレス宣教師が、新築された伝道教会の献堂式でわれわれに音楽面から支援してほしいと要請してきたのであるが、これに対して収容所側からはただちに許可が下された。そこでわれらの音楽家たちは、これまでに何度かわれわれの所に足を運んでミサを執り行ってもらっているアルバレス宣教師に対し、感謝の念を表せるこの機会を喜んで迎えたのである。

あちこちからの判断によれば、彼らの演奏は数多くの日本人会衆に強い印象を与え、市民の広い範囲にも大きな関心を引き起こしたようである。当地の新聞はこの式典について次のように記している。

徳島カトリック教会の献堂式が、日曜日の午前9時から執り行われた。当教会は四国教区に所属し、定礎式が本年2月に行われていたものである。祭壇の前にはマリア像が立ち、傍らには3人の聖者の立像が置かれている。式典には行政、商業学校、中学校、小学校の代表者が参加し、新聞社の代表者が数名、それに多数の信者が来ていて、アルバレス宣教師の出迎えを受けた。もう一人の宣教師がきらびやかに飾られた教会の中でミサを執り行った。当局の許可を受けてドイツ人俘虜も63名が集まっていた。指揮者ハンゼンの率いるその楽団が突然、賛美歌『自然における神の栄光』を演奏して、会衆の人たちに神を崇拝する真摯な気持ちを感じさせたのであった。式典後さらに会食が行われた。

前回のコンサート（第1巻第6号、1915年5月9日）

日本の陸軍省は俘虜に対し、これから先演劇の上演を禁じる命令を発した。ちょうど舞台が出来上がったところで、いくつかの上演計画がこれから並ぶというときに、当然ながらこの禁令はとりわけ非常に残念なことである。ただ慰めは、音楽演奏会はこの禁令の中には含まれないので、これから先もわがオーケストラの演奏を楽しむことはできるのである。

実際、もし音楽演奏会まで催せなくなったとしたら、収容所にとってとてつもなく大きな損失となることは、誰しも認めるだろう。これはオーケストラにとって、非常に嬉しい事実である。これから先、「拍手」してはならないということには、音楽家たちはさほど影響を受けないだろう。たとえ大きな拍手で表現されなくても、聴衆からの喝采を常に確信することができるのだ。

第1巻第15号（1915年7月11日）

オーケストラも、空気が乾いてきたので活動を再開した。その際サッカー選手よりずっと

好運でいられた。というのもこれまでに数本の弦が切れた程度で、それは脚の骨折より痛くもないし、容易に元の状態に戻れるからである。

オーケストラの練習は定期的におこなわれて、もうすぐ長らく待ち望んでいたコンサートを聞けるのではないかと期待させてくれる。もちろん、これは天気がこれから先も持つかどうかにかかっている。好運を祈ることにしよう。

第1巻第18号 (1915年8月1日)

新曲に熱心に取り組んできたオーケストラは、先週・先々週に行われて大いに喝采をあげた日曜日の午後の野外コンサートをこれからも開催し、われわれを楽しませてくれることになった。

徳島オーケストラ第25回コンサートについての手紙

(第2巻第6号 (1915年10月31日))

私の友人が、最近こんなことを言った。ほんとうにひどいよ。あの音楽、あの練習。神経がどうにかなる。馬だって耐えられるもんじゃない。五分後彼は「闇夜に立つ」を歌っていた。外からはメンデルスゾーンの春の歌が聞こえてくるというのに。奇妙な二重唱であるが、「強いられて徳島人となった」われわれにとって、これはまさに特徴的なことである。数多くの耐えがたい事に慣れてしまったために、意図して以前の暮らしぶりを思い出さなければ、隔離権を感じることはない。しかし、ののしることを日頃常としてしまっているが故に、同じ慣れからののしっている事の何と多いことか。音楽に対する私の友人の態度はまさにそれなのだ。だからそれは、芸術の友がまじめな仕事をこれから先も続けることを妨げるものではない。まじめな仕事だって？そのとおり。その態度にしても、その目的にしても、音楽を行う様は「まじめ」と呼んでいいものだ。今日、25回目を数えることとなったので、その成果が音楽にいそしむ態度から花開いたものか、われわれが目的、目標とするものに近づいたかどうか、一度考えてみるのもよいであろう。

もし音楽を自己目的であるとするならば、楽団はその努力を良い音楽をうまく表現するべく練習する方向に向けていたにちがいない。良い音楽だって？これまで25回の演奏会の曲目を見てほしい。そして、こちらに来たときにあった楽譜といえば、四声男性合唱曲の鉛筆書きの楽譜一枚きりであったこと、また「ボーテ・ウント・ボック」みたいな行きつけの楽譜屋などはなかったことを思い出してほしい。われわれの楽譜屋は指揮者の頭の中にあっただのである。彼が記憶を引き出しながら今ある曲を楽譜にしたわけなのだ。たしかにベートーヴェン全部を書き出したということはない。この神々しい音楽にまちがった音符をひとつも書き入れないとしたら、それはとんでもない業である。そこで、初めのうちは行進曲やワル

など、細かい点まで容易に思い出せるものにならざるをえなかった。それに勝手に作った音符も、モーツァルトの序曲ほどには問題にならない。しかし徐々に外界への新しいつながりが生まれて来るにつれ、可能な限りの最もすばらしいものがどんどん求められるようになり、道化芝居や流行歌はどんどんしかるべき場所へと追いやられていった。--このとおり、まじめな仕事なのだ。つぎに、指揮棒をメモによってのみ知る音楽家たちである。まず第1フルト、コンサートマスターのハイアーがいる。彼は毎朝、自分のパートの人間を集めて、午後の練習に備えている。その成果はすばらしい。一番最近参加したメンバーでさえ、しっかりポジションを上下することができ、スコア〔総譜〕に手を加えて難しい個所を変更することも不要になった。腕が上がったのである。このヴァイオリンのグループ同様、ヴィオラ、チェロ、金管楽器のグループ、木管楽器のグループがそれぞれまとまっているのが見られる。それぞれがそれぞれのリーダーを立てて。これが、まじめな仕事であることを認めるでしょう。では、その成果はどうなのだろうか。仕事の成果というものは、すでに為して来たものにあるというよりは、むしろ仕事によって基盤が作られたもので何がこれから達成できるかにある。だから、冬の計画を聞いてほしい。シンフォニー・コンサートを開催しようと思うのだ。それだけの力量があると感じている。もちろんマーラーやシュトラウスではない。ハイドンをプログラムに載せるだけで誇りに思う。室内楽も上演するつもりであり、ハイドンとモーツァルトの曲をするが、メンデルスゾーンもかなり弾きたい気持ちになっている。

確かに全てすばらしいことだ。しかし自己目的としての音楽は演奏家のためのものではないか、とあなたは言うかもしれない。音楽は、もっと別の観点から行うべきものだ。もしわれわれが、最初に述べた私の友人の発言が飛び出すような成果しか挙げていないとすれば、音楽を止めた方がいいだろう。だが聞いてほしい。第一に、音楽はドイツ文化のスターであること、音楽を広めることはドイツ文化を世界に紹介することだということをあなたは認めるだろう。そして、日本人将校の中にはすでに何人かの愛好者が現れていて、ただ単に聞くだけではなく実行し、「弦から妙なる音」を紡ぎ出そうと一生懸命努力している。徳島市民は、垣根越しにしか音楽を聞くことができないのだが、その中で楽譜と楽器の注文が日増しに増えている、と出入りの業者が明確に語り、われわれがそのきっかけを作ったと述べている。

そして最後に肝心なことは、それがわれわれ自身に役立っていることだ。その証拠として日曜コンサートの聴衆、それに拍手に代わって唯一許されているブラヴォーの歓声を引き合いに出そうとは思わない。そのかわり、練習しているところに来て、どこかの隅や窓の横・階段の上などに静かに、こっそり座って音楽をまるで高価な贈り物であるかのように自分の中に取り込んでいる人々みんなの嬉しそうな、幸せそうな顔を見てほしい。これこそが、誇りたかき「まじめな仕事」のもっともすばらしく深みのある証拠である。

さて冒頭の友人、彼には実にたくさん名前があるのだが、彼には言いたいように言わせ

ておくことにする。われわれはドイツ文化を広めることができ、それを受け入れたい人にはすばらしい幸福を贈ることができるのである。冬の天候が良いものであって、平和という大きなすばらしい贈り物をもたらすことがないならば、上に述べたような成功をたくさんもたらしてくれればと思う。

第1回シンフォニー・コンサート（第2巻第9号、1915年11月21日）

今年4月の第1回コンサートの批評で、わがオーケストラのすばらしい演奏を誇らしく指摘することができた。しかし、前の日曜日のシンフォニー・コンサートを聞いてから昔のコンサートを思い起こすと、微笑まざるをえない。それはちょうど新型の80馬力ベンツの所有者が、最初の馬車型の自動車を思い出して笑みを浮かべるのと似ている。

それによって、わがオーケストラの昔の演奏を後になって貶めようというわけではない。それどころか、その当時の演奏も今日の演奏と同様に賞賛すべきことである。ひょっとしたら、何事も最初は難しいだけに今日以上かもしれない。

進歩の跡がはっきり認められる。実に驚くべきことである。単にメンバーの数が2倍になり、所有する楽譜の数が大きく増え、現在はトロンボーン、コントラバス、フルート、クラリネットに足踏みオルガンがあるだけではない。何よりも音楽家たちが、この間に捲まず撓まず真剣な作業を通して技能を向上し、オーケストラでの合奏に確かさと理解を深めている。そうすることによってはじめて、指揮者のハンゼン一等音楽兵曹殿がベートーヴェンの二長調協奏曲に挑戦することは可能となったのであり、しかもその夕べに示されたように完全な成功を収めることができたのである。

むろんこの際に、彼のヴァイオリン独奏者としての卓越した芸術的才能を考慮し、主要素とすることができたのを忘れてはならない。こうして、オーケストラの確実で、ソロに合わせた伴奏を得て俘虜収容所の柵を大きく越え、コンサートホールの明るいライトも怖れる必要のない演奏を成し遂げたのである。願わくば、将来彼とオーケストラにもっと大勢の聴衆の前での栄えある演奏の機会が与えられることを。

ハイドンの皇帝四重奏曲は、ベートーヴェンの後に置かれたために高い評価を得るのは難しかった。ひょっとしたら室内楽の部を、プログラム冒頭にした方が良かったのではないか。この夕べの最後を飾ったのは、モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」であった。この曲は可愛らしくて甘く、旋律豊かで聴衆にとっては理解しやすいものだけに、ベートーヴェンの協奏曲よりも大きな喝采を浴びていた。

この第1回シンフォニー・コンサートを聞き終えてみて、オーケストラが予定している次のシンフォニー・コンサートが楽しみとなった。

われわれは、音楽家たちが今の栄冠で満足することはないことを知っている。そして--- まったくいやなことだが --- まだ長く俘虜生活が続くならば、将来ひょっとしてこのコンサー

トをあの例の微笑みで思い返す時が来るかもしれない。

クリスマスの祝祭について（第2巻第15号、1916年1月1日）

クリスマスイブの5時30分に、クリスマスの祝祭が始まった。大広間の真ん中に立てられたクリスマスツリーのろうそくに火がともされ、ドアが開けられると入場する人たちの目に、飾り立てられた大広間の祝祭的で大いに期待を持たせる光景が飛び込んで来た。クリスマスツリーは輝き、長いテーブルにはとてもたくさんのプレゼントが持ちこたえられないほど積んであった。

ミサに始まって、全員が古いクリスマスソングを歌った後、デムラー大尉殿が長いスピーチを行った。その後、祝祭幹事役のボイトナー少尉殿のお世話によって意外な出し物があった。彼はこっそりと、ルートヴィヒ・トーマの小さなクリスマス劇の上演を準備していたのであった。劇の舞台は塹壕の中で、故国の勇敢な同胞たちの気分を素朴に感動的に伝えるものであった。演技もすばらしかった。オール海砲兵が大尉役、アウアー一等海砲兵とFl. ケラー海砲兵がバイエルン出身の後備兵役、R. ケラー一等海砲兵が少尉役で出演し喝采を浴びた。

次に、故国の人々の愛と好意とによって豊富に積まれたプレゼントのテーブルへと移った。救援委員会は各人に、ビールとリンゴ、ケーキそれに薫製の魚を送ってくれた。さらに神戸と漢口の婦人会、そして青島のドイツ人が寄せてくれた多くのすばらしい物が付け加えられた。

こうして各人の座席の前には、山のようなプレゼントができたわけである。故郷から小包が届けられたことのない者には、特別に配慮がなされた。

祝日第1日目には、午後にコンサートが催された。その中心は指揮者のハンゼン一等音楽兵曹の編曲による大きなクリスマス曲メドレーであった。これは非常に大きな喝采を浴びて、翌日再度演奏せねばならなかったほどである。われわれが特に気に入ったのは、合唱とオーケストラによって演奏されるワルツ「美しく青きドナウ」であった。

第2日目には演劇の上演があったが、これについては別の個所で詳しく述べられている。

わが楽団の第50回コンサートにむけて

（第3巻第15号、1916年8月20日）

もし収容所の中で、われわれに使うことのできる多くの時間を正しく利用した事業があるとしたら、それはわが楽団である。その生い立ちについては第25回コンサートの折に明らかにしたが、それ以降音楽的技能のみならず楽器の数もうれしいことに増大している。今日の楽団の編成は次のとおりである。

指揮	ハンゼン一等音楽兵曹
デュムラー海軍大尉殿	第1チェロ（首席奏者）
エルドニス経理秘書官殿	第1ヴァイオリン
ヴェルナー予備役副曹長	副指揮
フュードリヒ一等兵曹	第2ヴァイオリン
シュテューラー一等兵曹	第3チェロ
ハイアー兵曹	第1ヴァイオリン（コンサートマスター）
ナスート兵曹	第1ベース（第4チェロ）
シュルテ兵曹	第2ヴァイオリン
シュースター一等海兵	第1フルート
ドーベ予備役一等海兵	第2ヴァイオリン（首席奏者）
ヘルマン一等海兵	第1ヴァイオリン
レックス一等海兵	第2ヴァイオリン
プリルヴィッツ一等海兵	大太鼓
カイク海砲兵	第1ヴァイオリン
フランケ海砲兵	第1ヴァイオリン
ラングハイム海砲兵	第1ヴァイオリン
ナイツァール海砲兵	第2ヴァイオリン
グリューネヴェラー海砲兵	第1ヴィオラ
メラー海砲兵	第2ヴィオラ
Fr. シュミート海砲兵	第2チェロ
シルト海砲兵	第2ベース
キューリヒ海砲兵	第2フルート
ペルニ海砲兵	第1クラリネット
ブロンナー海砲兵	第2クラリネット
ギュンシュマン海砲兵	第1トランペット
Fl. ケラー海砲兵	第2トランペット
ネーフエン海砲兵	トロンボーン
キルシュブリュッガー海砲兵	小太鼓
ヴィーザー予備役海兵	オルガン

これまでにどんな仕事が行われてきたのかを知るには、記念の今日出された曲目を見さえすれば良い。まるでその音楽活動のあらゆる側面の代表例を示そうと考えて編成されたように思えるのである。

ワーグナー、ウェーバー、メンデルスゾーン、マイヤベーアといった、プロの音楽家だけのオーケストラでも大変な練習を要求するような、古典的な音楽作品がプログラムに並んでいる。すべて、第50回コンサートのために新たに練習したものだ。わが楽団の演奏に慣れ親しんだ人ならもう知っているように、これらの作品はただ単に演奏するだけではなく、楽器から引き出される音色に耳を傾けることが楽しみとなるように表現しなければならない。その一方では、軽やかなメドレーや元気な行進曲なども記念コンサートのプログラムに含まれている。

音楽的な素養のなかったアマチュアを含むわがオーケストラが、疑いもなく今日あるような高みにまで達したのはどういうことなのかは、本来自身加わっているものだけが判ることである。しかし外部に居る人間にも、音楽家たちの仕事ぶりを何度か眺める機会をが与えられている。あの倦むことなく行われる練習、個人個人であったり、グループであったり、全体であったりする練習によって、今日この俘虜収容所で定期的にこんなに良い音楽を聞くことができるようになったのだ。

楽団内での仕事といえば、オーケストラの指導者であるハンゼン一等音楽兵曹の名を挙げねばならない。彼のたゆまざる努力が、楽団の今日の姿を可能にした大きな要因である。音楽家たちをまとめ、この俘虜収容所にいるわれわれのような音楽好きの聴衆の前で、自分たちの演奏曲目を心おきなく披露できるようにしているのだ。

彼の活動は新しい楽曲の研究と指揮に止まらず、あるときはピアノ曲から編曲をしたり、大オーケストラ向けに書かれた元のスコアを、ここの編成に合わせて修正するなどもしている。うわさでは、スコアのいくつかは記憶を元に書いたとさえ言われている。

わが音楽家たちにとって、練習は必ずしも喜びばかりではない。狭い場所で共同生活しているために、音楽の練習のおかげで一日数時間うるさい思いをし、音楽に対して大いに不平を言ったりもするような人もいる。しかしそれでも彼等の創造意欲を萎えさせることはできず、立派な音楽家になり、オーケストラを聞く価値のあるものにすべく、目標をもって迷わず練習をしてきた。楽団には定期的な日曜コンサートばかりでなく、演劇の夕べ、寄席、演芸の夕べ、クリスマスの祝祭など他の催しでの演奏を通じて、楽しい時間を過ごさせてもらった。

われわれにとって楽しいだけでなく、重要な過小評価してはならない要素がある。すなわち、かなり多くの戦友が楽団を通じて音楽的知識を手にしたことであって、これから先の人生で、たとえ楽団のメンバーが散り散りになってしまった後でも、この知識により余暇の時間をすばらしいものにできる。将来われわれ受動的な参加者は、時たまオーケストラのことを思い出すぐらいであろうが、メンバー自身はきっと「徳島オーケストラ」をしばしば思い出し、感謝することであろう。

徳島オーケストラ演奏会プログラム

以下のリストは『トクシマ・アンツァイガー』記載の「徳島オーケストラ」のすべての演奏会と、その演奏曲目である。ただし、演芸の夕べおよびミサでの演奏曲目は省略している。その際、開催〔予定〕日の記載方法などを統一し、作曲家名なども混乱がみられるのを正しいと思われる方に統一してある。これらの演奏曲目の中には日本初演と見られるものもあるが、今回それらについての考察はしない。

演奏会（1915年4月5日）

第1部

1. 弦楽四重奏曲 作品 80 モーツァルト
2. カンツォネッタ（ヴァイオリン協奏曲より）
独奏 ハンゼン一等音楽兵曹 チャイコフスキー

第2部

1. 3つの歌
合奏団と協演 アイヒホルン
2. 独唱 ヴェルナー副曹長
《戦いを前にしたドイツ戦士の夢》 ハンゼン
3. ワルツ間奏曲《舞踏会を離れて》 ジレー
4. 《オーストリアにあらゆる栄誉あり》
(1914年ブリュッセル入城行進曲) ノヴォトニー

演奏会プログラム（1915年5月2日）

第1部

1. 弦楽四重奏曲第5番（作品 158） モーツァルト
 - a) アレグロ
 - b) アンダンテ・ウン・ポコ・アレグレット
 - c) テンポ・ディ・メヌエット
2. メヌエット、弦楽四重奏曲第3番（作品 44）より メンデルスゾーン

第2部

3. 《ハールンの息子たち》、バリトンのためのバラード
独唱 ヴェルナー副曹長 ウムラウフト
4. 歌劇「ファウストとマルガレーテ」幻想曲 グノー

第3部

5. ラデツキー行進曲 ヨハン・シュトラウス
6. バリトンとオーケストラのための2つの歌

- a) 《反抗の歌》(ノルウェー民謡)
- b) 《おお、ヴェルメランドよ》(スウェーデンの故郷の歌)
- 独唱 ミレンツ予備役一等海砲兵
- 7. 《夢の国へ来たれ》 フリードマン
- 8. 喜歌劇「映画の女王」より ジルベール
 - a) 《かわいい娘っこ》
 - b) 《夜に》
- 9. ホーエンフリートベルク行進曲 フリードリヒ2世王*

精霊降臨祭コンサート (1915年6月6日)

第1部

- 1. 歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 モーツァルト
- 2. カンツォネッタ (ヴァイオリン協奏曲より) チャイコフスキー
- 3. シチリアーノ、弦楽三重奏曲より ハイドン
- 4. バストラーレ (リクエスト曲) アイヒホルン
- 5. 結婚セレナーデ クローゼ

第2部

- 6. 自動車行進曲《万歳、皇帝がやって来る》 トランスラトゥール
- 7. 歌劇「ファウストとマルガレーテ」大幻想曲 グノー
- 8. 《汝が胸で夢を見させよ》 トロンバのための歌 クラジンスキー
- 9. ヴァルス・ブリュヌ (茶色のワルツ) クリーア
- 10. ツーステップ** 《花の乙女》 ヴァインリヒ

演奏会 (1915年7月18日)

- 1. 行進曲《勝利の旗の下》 ブロン
- 2. 間奏曲《結婚セレナーデ》 クローゼ
- 3. ガヴォット《リーゼロッテ》 アダム
- 4. ポルカ《どういたしまして》 ヨハン・シュトラウス
- 歌劇「ウィーンのカリオストロ」より
- 5. 《女の子たちは天使のよう》、喜歌劇「40日間世界一周」より ジルベール
- 6. ワルツ《すばらしきかな、人生》 エドゥアルト・シュトラウス
- 7. 行進曲《旧友》 タイケ

* プロシアのフリードリヒ大王 (1712-1786) のこと。

** ツーステップとはアメリカのカントリーダンスとそのための曲。

本日のプログラム (1915年8月1日)

1. ラデツキー行進曲
2. バレー曲「人形の妖精」大幻想曲 バイエル
3. アリア*、ニ長調組曲より、独奏ヴァイオリンとオーケストラ
4. ワルツ《アンナ、いったいどうしたの》 ファル
喜歌劇「アウグスチン君」のモチーフによる
5. フィンランド騎兵隊行進曲 (30年戦争時代の曲)

演奏会曲目 (1915年8月8日)

1. 歌劇「後宮からの誘拐」序曲 モーツァルト
2. 《ヴァイオリン弾きの郷愁》 ケーゲル
ヴァイオリンとオーケストラのためのコンサート・レントラー
3. 《夢の国へ来たれ》 フリードマン
4. 兵士の歌《灰色の野戦服》、笑劇「号外」より コロ
5. ホーエンフリートベルク行進曲 フリードリヒ2世

本日のプログラム (1915年8月15日)

1. 自動車行進曲《万歳、皇帝がやって来る》 トランスラトゥール
2. 《トロイメライ》、「子供の情景」より シューマン
3. 《ヴァルス・ブリュヌ》
4. 喜歌劇「映画の女王」より ジルベール
a) 《かわいい娘っこ》
b) 《夜に》
5. インディアン風間奏曲《エイシャ》 リンゼー

本日の演奏会の曲目 (1915年8月22日)

1. 故郷の歌行進曲 リンデマン
2. 《婚礼の合唱》、歌劇「ローエン格林」より ワーグナー
3. バレー曲「人形の妖精」大幻想曲 バイエル
4. 歌曲《汝が胸で夢を見させよ》 クラジンスキー
5. インディアン風間奏曲《赤い羽根》 ミルズ

プログラム (1915年8月29日)

1. プロイセン行進曲

* このプログラムの後に書かれている記事から判断して、これは J. S. バッハの管弦楽組曲第3番の第2楽章。一般に「G線上のアリア」の名で知られる名曲。

2. 2つの民謡

a) «さらば、静かな路地よ»

b) «大切な故郷»

3. ワルツ«すばらしきかな、人生» エドゥアルト・シュトラウス
4. «女の子たちは天使のよう」、喜歌劇「40日間世界一周」より ジルベール
5. «小さな鉛の兵隊» 笛の奇想曲 ロザイ

第17回演奏会（1915年9月5日）

1. 行進曲«勝利の旗の下» ブロン
2. ヘ調の旋律 ルビンステイン
3. レントラー«おばあちゃん» ランガー
4. «ベルリンは揺れる」、人気曲を集めたメドレー モレーナ
5. 二重唱 «頭上を鳩が飛んでいるみたいだ」、笑劇「号外」より コロ

第18回演奏会（1915年9月12日）

1. ドイツマイスター連隊行進曲 ノヴォトニー
2. «金婚式» 古風なアリア ガブリエル・マリー
3. 歌劇「ホフマン物語」より間奏曲と舟歌 オッフエンバック
4. ワルツ«美しく青きドナウ» ヨハン・シュトラウス
5. «小さな女の子」、笑劇「冗談男爵」より コロ

第19回演奏会（1915年9月19日）

1. 行進曲«旧友» タイケ
2. 歌劇「ファウストとマルガレーテ」大幻想曲 グノー
3. «宵の明星に寄せる歌」、歌劇「タンホイザー」より ワーグナー
4. 間奏曲、バレエ曲「コッペリア」より ドリーブ
5. 兵士の歌«灰色の野戦服」、笑劇「号外」より コロ

第20回演奏会（1915年9月26日）

1. 勝利行進曲«剣闘士の入場» フチック
2. «婚礼の合唱」、歌劇「ローエングリン」より ワーグナー
3. «ヴェーザー川のほとりで» プレッセル
トロンボーンとオーケストラ伴奏のための歌
4. メドレー«流行歌選集» リンケ
5. インディアン風間奏曲«エイシャ» リンゼー

第21回演奏会（1915年10月3日）

1. 歌劇「後宮からの誘拐」序曲 モーツァルト
2. 《春の歌》 メンデルスゾーン
3. ガヴォット《リーゼロッテ》 アダム
4. フランス風ポルカ《どういたしまして》
歌劇「ウィーンのカリオストロ」より ヨハン・シュトラウス
5. 行進曲《空に、陸に、海に》 シュタイン

演奏会（1915年10月10日）

1. ヨルク行進曲 ベートーヴェン
2. 《飾らぬ告白》 トメ
3. 《ヴァイオリン弾きの郷愁》 ケーゲル
ヴァイオリンとオーケストラのためのレントラー
4. ワルツ《アンナ、いったいどうしたの》 ファル
喜歌劇「アウグスチン君」のモチーフによる
5. 勝利行進曲《剣闘士の入場》 フチック

第23回演奏会（1915年10月17日）

1. 歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 モーツァルト
2. ヘ調の旋律 ルビンステイン
3. ガヴォット《リーゼロッテ》 アダム
4. ワルツ間奏曲《愛の夢》 ベッカー
5. ハインリヒ王子の帝国第一海兵師団巡閲行進曲

第24回演奏会（1915年10月24日）

1. 歌劇「フィガロの結婚」序曲 モーツァルト
2. 男性コーラスのための2つの歌
a) 《エンヒェン・フォン・ターラウ》
b) 《悲しいかな、別れねばならぬ》
合唱「ゲルマニア」合唱団
3. 結婚セレナーデ クローゼ
4. 《小さな鉛の兵隊》、笛の奇想曲 ロザイ
5. 《プロイセンの栄光》 M.A.K. パレード行進曲 ピーフケ

第25回演奏会（1915年10月31日）

1. 勝利行進曲《剣闘士の入場》 フチック
2. 歌劇「マルガレーテ」大幻想曲 フチック

- | | |
|--|-----------|
| 3. 《ヴェーザー川のほとりで》
トロンボーンとオーケストラ伴奏のための歌 | プレッセル |
| 4. 《ベルリンは揺れる》
人気のオペレッタ曲を集めたメドレー | モレーナ |
| 5. 自動車行進曲《万歳、皇帝がやって来る》 | トランスラトゥール |

第26回演奏会（1915年11月14日）

第1回シンフォニー・コンサート

- | | |
|--|---------|
| 1. ヴァイオリンとオーケストラのための二長調協奏曲より
アレグロ・マ・ノン・トロツポ * | ベートーヴェン |
| 2. 皇帝四重奏曲 | ハイドン |
| 3. セレナード《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》 | モーツァルト |

第27回演奏会（1915年11月28日）

- | | |
|------------------------------|----------|
| 1. 《プロイセンの栄光》 M.A.K. パレード行進曲 | ピーフケ |
| 2. バレー曲「人形の妖精」大幻想曲 | バイエル |
| 3. 舟歌、歌劇「ホフマン物語」より | オッフエンバック |
| 4. 《流行歌選集》 | リンケ |
| 5. 現代の笑劇「号外」より | コロ |

徳島オーケストラ第28回演奏会（1915年12月12日）

第2回シンフォニー・コンサート

- | | |
|---|--------|
| 1. 交響曲第6番 *
a) アダージョ・カンタービレ
b) ヴィヴァーチェ・アッサイ
c) アンダンテ
d) メヌエット
e) アレグロ・ディ・モルト | ハイドン |
| 2. エレジー（作品10の3）
L. シュポーアによる導入部付き
ヴァイオリン独奏とオルガン伴奏 | エルンスト |
| 3. 歌劇「フィガロの結婚」序曲 | モーツァルト |

* これはこの協奏曲の第1楽章である。

** この交響曲は、現在の番号で言うと第94番「驚愕」である。なお、a) と b) は別の楽章ではなく、同じ第1楽章のそれぞれ序奏と本体にあたる。

クリスマスコンサートの曲目（1915年12月24日）

第1部

1. 行進曲《捧げ銃》アイルボウト
2. 《春の目覚め》エマヌエル・バッハ
3. 2つの弦楽四重奏曲
 - a) メヌエットボッケリーニ
 - b) 《トロイメライ》シューマン
4. 《美しく青きドナウ》ヨハン・シュトラウス
男性コーラスとオーケストラのためのワルツ
H. ハンゼンが男性コーラス用に編曲

第2部

1. 《客人のワルトブルク城への入場》、「タンホイザー」よりワーグナー
2. 《クリスマスの雰囲気》ネットバル
3. ワルツ《愛の夢》ベッカー
4. クリスマス・大メドレー *ハンゼン

第31回演奏会（1916年1月23日）

第3回シンフォニー・コンサート

- ヴァイオリンとオーケストラのための二長調協奏曲ベートーヴェン
- a) アレグロ・マ・ノン・トロポ
 - b) ラルゲット
 - c) ロンド

第32回演奏会（1916年2月20日）

第1部

1. 行進曲《ルイトポルト摂政公》シュレート
2. 歌劇「ルチア・デイ・ランメルモール」幻想曲ドニゼッティ
3. 弦楽四重奏曲《戦いを前にしたドイツ戦士の夢》オイレ
4. キャラクター・ピース《衛兵のパレード》アイレンベルク

第2部

1. 歌劇「カルメン」より導入部とコーラスビゼー
2. 歌曲《お前はなんと美しい》によるパラフレーズヴァイト
3. 喜歌劇「忠実な農夫」よりワルツファル
4. 行進曲《数え歌》、喜歌劇「離婚した女」よりファル

* このハンゼンの編曲は、後の板東俘虜収容所でクリスマスに演奏され好評を博したと『ディ・バラック』に記されているものと同じではないかと思われる。

第33回演奏会（1916年2月27日）

協演：「ゲルマニア」合唱団

1. 歌劇「白衣の貴婦人」序曲 ボワルデュー
2. 歌
 - a) «歌の奉献式» モーツァルト
 - b) «オーストリアの騎士の歌» 歌唱：デュムラー
 - c) «エルスライン・フォン・カウプ» フィルケ
3. ワルツ«ウィーンの森の物語» ヨハン・シュトラウス
4. メドレー«聴衆から、そして聴衆とともに» フェトラ
5. 行進曲«モルトケの思い出» リューデッケ

第4回シンフォニー・コンサート（1916年4月16日）

1. 交響曲第1番変ホ長調«太鼓連打»* ハイドン
 - 第1楽章 アダージョ - アレグロ・コン・スピリート
 - 第2楽章 アンダンテ
 - 第3楽章 メヌエット
 - 第4楽章 アレグロ・コン・スピリート
2. ヴァイオリンのためのロマンス、ト長調 ベートーヴェン
3. 序曲«静かな海と楽しい航海» メンデルスゾーン

復活祭コンサート（1916年4月23日）

1. 行進曲«ヒンデンブルク万歳» ミヒャエル
2. 歌劇「魔弾の射手」幻想曲 ウェーバー
3. 歌曲«海に寄す» シューベルト
4. 喜歌劇「こうもり」メドレー シュトラウス
5. ワルツ«スケートをする人々» ワルトトイフェル
6. 行進曲«万歳、ドイツマイスター» エルトル

第36回演奏会（1916年4月30日）

1. 歌劇「白衣の貴婦人」序曲 ボワルデュー
2. «春の目覚め» エマヌエル・バッハ
3. ワルツ«ウィーンの森の物語» ヨハン・シュトラウス
4. メドレー«流行歌選集» リンケ
5. 行進曲«数え歌»、喜歌劇「離婚した女」より ファル

* 現代の番号付けでは第103番にあたる。

演奏会 (1916年5月21日)

- | | |
|-----------------------------------|----------|
| 1. 行進曲《捧げ銃》 | アイルボウト |
| 2. 歌劇「ストラデラ」序曲 | フロトー |
| 3. 《春の歌》 | メンデルスゾーン |
| 4. 《愛の夢》 | R. ベッカー |
| 5. 《市警団の行進》 ビーダーマイヤー時代のキャラクター・ピース | イエッセル |
| 6. 故郷の歌行進曲 | リンデマン |

第38回演奏会 (1916年5月28日)

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. 歌劇「プレチオーザ」序曲 | ウェーバー |
| 2. 《金婚式》 古風なアリア | ガブリエル・マリー |
| 3. 歌曲《若き頃》のパラフレーズ | フリードマン |
| 4. ワルツ《バラの鎖》 | イエッセル |
| 5. 行進曲《わが祖国ドイツ》 | イエッセル |

第39回演奏会 (1916年6月4日)

- | | |
|---|---------|
| 1. 《プロイセンの栄光》 M.A.K パレード行進曲 | ピーフケ |
| 2. 《婚礼の合唱》、歌劇「ローエングリン」より | ワーグナー |
| 3. 歌曲《汝が胸で夢を見させよ》 | クラジンスキー |
| 4. ワルツ《アンナ、いったいどうしたの》
喜歌劇「アウグスチン君」のモチーフによる | ファル |
| 5. ツーステップ《花の乙女》 | ヴェンリヒ |

精霊降臨祭コンサート (1916年6月11日)

- | | |
|--------------------------------------|--------|
| 1. ビョルネボルガネス行進曲 1808年時代の古いスウェーデンの行進曲 | |
| 2. 《森の郵便》、トランペットとオーケストラ | シェーフエ |
| 3. ワルツ間奏曲《甘い思い出》 | ジーデ |
| 4. 《鉛の兵隊のパレード》 キャラクター・ピース | イエッセル |
| 5. 行進曲《公園の兵士たち》 | モンクローゼ |

第41回演奏会 (1916年6月18日)

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 1. 《万歳、皇帝がやって来る》 | トランスラトゥール |
| 2. 《客人のワルトブルク城への入場》、「タンホイザー」より | ワーグナー |
| 3. 「ヴァレンシュタインの陣営」より《騎士の歌》のパラフレーズ | ペータース |
| 4. ワルツ《すばらしきかな、人生》 | エドゥアルト・シュトラウス |
| 5. インディアン風間奏曲《赤い羽根》 | ミルズ |

第42回演奏会（1916年6月25日）

- | | |
|--------------------------|--------|
| 1. 行進曲《デュッペルの要塞》 | ピーフケ |
| 2. 《ローレライ》のパラフレーズ | ネスヴァトバ |
| 3. 喜歌劇「フィレンツェの精霊降臨祭」メドレー | ヒブルカ |
| 4. ワルツ《わがウィーンの心》 | エルトル |
| 5. 《コロラド川》 アメリカ風ロマンス | イエッセル |

第43回演奏会（1916年7月2日）

- | | |
|---------------------------------|---------|
| 1. 行進曲《ヒンデンブルク万歳》 | ミヒャエル |
| 2. 歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲 | モーツァルト |
| 3. 間奏曲、バレエ曲「コッペリア」より | ドリーブ |
| 4. 《ベルリンは揺れる》、人気のオペレッタ曲を集めたメドレー | モレーナ |
| 5. ヨルク行進曲 | ベートーヴェン |

第44回演奏会（1916年7月9日）

- | | |
|-------------------|----------|
| 1. 行進曲《志操堅固》 | ブロン |
| 2. 歌劇「トロバトーレ」メドレー | ヴェルディ |
| 3. 歌曲《心と花》 | トバーニ |
| 4. ワルツ《星の彼方に》 | フォルシュテット |
| 5. 間奏曲《マンシ》 | ジーデ |

第45回演奏会（1916年7月16日）

- | | |
|-----------------|----------|
| 1. 行進曲《捧げ銃》 | アイルボウト |
| 2. 歌劇「白衣の貴婦人」序曲 | ボワルデュー |
| 3. 《飾らぬ告白》 | トメ |
| 4. ワルツ《沼のバラ》 | ボーゼ |
| 5. 《日本の衛兵の行進》 | フォルシュテット |
| 6. ツーステップ《金のムチ》 | キンレー |

第46回演奏会（1916年7月23日）

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1. 《パッペンハイムの老人》 | 1631年作曲の行進曲 |
| 2. 「左官と鍵屋」序曲 | オベール |
| 3. 歌曲《乙女よ、紡げ》のパラフレーズ | ネール |
| 4. ワルツ《しゃくなげ》 | アンドレ |
| 5. 蛍の舞曲 | ラ・サル |

第47回演奏会（1916年7月30日）

- | | |
|---------------------|------------|
| 1. 行進曲《万歳、ドイツマイスター》 | エルトル |
| 2. 歌劇「ファウスト」幻想曲 | グノー |
| 3. メヌエツト | ボッケリーニ |
| 4. ワルツ《ウィーンの森の物語》 | ヨハン・シュトラウス |
| 5. インディアン風間奏曲《エイシャ》 | リンゼー |

第48回演奏会（1916年8月6日）

- | | |
|---------------------------|----------|
| 1. 行進曲《ルイトポルト摂政公》 | シュレート |
| 2. 歌劇「ルチア」幻想曲 | ドニゼッティ |
| 3. 歌曲《お前はなんと美しい》によるパラフレーズ | ヴァイト |
| 4. ワルツ《スケートをする人々》 | ワルトトイフェル |
| 5. 《コロラド川》 アメリカ風ロマンス | イエッセル |

第49回演奏会（1916年8月13日）

- | | |
|--------------------------|---------|
| 1. 行進曲《モルトケの思い出》 | リュエデッケ |
| 2. ヘ調の旋律 | ルビンステイン |
| 3. リュエデッケの歌曲《若き頃》のパラフレーズ | フリードマン |
| 4. バレー曲「人形の妖精」幻想曲 | バイエル |
| 5. 笑劇「冗談男爵」より | W. コロ |
| a) 《もしも娘に旦那様ができたら》 | |
| b) 《小さな女の子》 | |

第50回演奏会（1916年8月20日）

第1部

- | | |
|---|----------|
| 1. 序曲《静かな海と楽しい航海》 | メンデルスゾーン |
| 2. 《歓喜に寄す》、第9交響曲ニ短調より | ベートーヴェン |
| 3. ヴァイオリンとオーケストラ伴奏のためのロマンス
独奏 ハンゼン一等音楽兵曹 | スヴェンセン |
| 4. 《ヴォータンの別離と火の魔法》、「ワルキューレ」より | ワーグナー |

第2部

軍隊行進曲、音による大きな軍隊の絵画 コット

第3部

- | | |
|-----------------|------------|
| 1. たいまつ舞曲第1番ロ長調 | マイヤベーア |
| 2. ワルツ《南国のバラ》 | ヨハン・シュトラウス |
| 3. 現代オペレッタ巡回 | L. ウルバッハ |
| 4. 祝典序曲 | ウェーバー |

おわりに

今回の抄訳による『トクシマ・アンツアイガー』の紹介は俘虜たちの生活や活動に記事の選択をしぼったが、それでもこれで全てというわけではない。身边雑事をテーマにしたものには他に「鏡」というタイトルの娯楽欄があるが、今回はこれについては触れていない。さらに演劇やスポーツといった活動についての記事もある。やはりできるだけ広い範囲の翻訳を出版できるよう、各方面の協力を仰ぎながら努力したいと思う。

最後になったが、この抄訳は阿波銀行学術・文化振興財団より活動支援いただいたことに対する報告ともなっている。ここに記して感謝する次第である。

2005年3月21日

『徳島新報』翻訳・刊行会

川上 三郎

田村 一郎